

特 103
91

尼港問題と内一

所謂時代精神の暴露

0m 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15

始



特103
91

五百木良三先生口述



尾港
問題と白

所謂時代精神の暴露

大正
9. 11. 10
内交

例言

一、此の一篇は五百木良三先生が時事に慨する所あつて、公にせられたもので、初版は先生自ら配本せられたのである。其後聞き傳へて、此書を求むる人あり、又た其の心あつても、更らに之を手に入れる便宜のない者もあるので、特に先生に請うて、重版し廣く之を頒つことにした。

一、重版に際して實費を徴するのは、其志あつて便宜のない人のために、遺憾なきを期する故に外ならぬ。

一、此書刷行の意志、既に一般の出版物と異つて居るのであるから

吾人と靈犀一點相通する所あらば、互に往來して國家のため相
結束して起ちたいと云ふ希望を持つて居ること云ふことを附記し
て置く。

大正九年十一月

發行者誌

目次

一、時代精神の暴露	一
二、事件、發生の由來	七
三、自明の責任問題	一八
四、姑息の善後措置	三六
五、浮薄なる撤兵論	四二
六、重大なる悪影響	五二
七、根本的一大革新	六二
再版に臨んで一言	一

尼港問題を通して

五百木良三先生口述

一、時代精神の暴露

今次の尼港事件は、殊に其の殘忍暴虐の點よりして、まさしく世界史上空前の來事と云ふに足る。同時に帝國に取りても眞に有史以來の一大凌辱である。然るに之に對する我が國民一般の態度が、爾かく弛緩的に爾かく消極的なることも、是れ亦た前代未聞の變調で、更に斯ばかりの一大事件に關し、天下尙ほ一人の責任者無しと云ふも、古今無類の怪事である。斯くて尼港事件なるものは、事件自體と、それを抱擁せる一切の周圍と、悉く皆な未曾有の珍現象を以て組立てられて居る。此の極端なる現象は果して何を意味するのであらう。唯だ偶然なる一箇の出來事か、それとも天の特に我れに提示したる一大公案か、我國民は先づ此の謎に對して、適切なる答解を下さねばならぬ。

試みに米國をして我地位に立たしむれば如何。ルシタニヤ事件にすらあれほどの國民的大運動を起こし、終に大戰參加の動機たらしめた彼等國民である。一人の婦人の凌辱にすら直ちに私刑を要求し、人種的大闘争を敢てする彼等國民である。彼等が今日の如き我等の場合に於て何を爲すべきかは、固より想像に餘りある。更らに英國をして之に代らしむれば如何。印度に支那に將た南阿に屢々繰返されたる彼の歴史は、最も雄辯に其の採るべき手段を説明して居る。僅かに二人の宣教師の血液を以て、膠州灣を占領せし獨逸の如きは、必らずしも茲に引例するの必要もない。苟しくも一箇獨立國として其の權威を保持するほどのもので、尼港事件の如き大問題に逢着しながら、帝國の現在の如く、爾かく煮え切らざる態度を取るものが、何處の世界に又たとあらうぞ。

併しながら、帝國と雖ども、如是の變態は今日初めて見出したる新記録に屬する。遠く遡るまでもなく、明治の初頭、國力猶ほ甚だ微なる時代に於ても、會々若干の琉球人が臺灣に漂着して、土人の殺害を蒙つたと云へば、直ちに臺灣征討の師を起すだけの元氣はあつた。降つて日清、日露兩役の如きは云はずもがな、最も近く山本内閣時代に發生せる南

京事件に見るも、當時戰場混亂の場合、張勳部下の兵卒が、我が館屋の所持せる紙製の國旗を破棄したと云ふので、所謂國旗凌辱問題となり、國民は出兵を要望すてふ決議の下に、一大民衆運動は忽ち時の内閣を包圍したのである。我國民もつひ數年前までは、まだ斯うした意氣に充ち満ちて居た。それが今日の有様はどうであらう、僅かなる歲月の間に其の前後の變化は、實に隔世の感がある。彼と是と殆ど同一の國民とは思はれぬ程である。

事實に於て、今次の事件發生當時の如きは、我上下一般の態度は、驚くべきほど冷然たるものであつた。動々もすれば對岸の火災視せんとする風があつた。さればこそ、平素軟派の總本家とし指笑せらるゝ外務省側から、却つて逆まに國民の腑甲斐なさを憤慨するといふ珍妙の喜劇さへ演出されたのである。さうして其の遅れ走せの物議が、やうやく輿論らしき聲となつたのも、我救援隊の公報が到着してからのことである。而已ならず、其の公憤と稱し國論を唱ふるものも、一向に熱もなければ力もなく、更らに統一さるべき中心點もない。但だ此の間渾てに共通せるものと云へば一箇の消極的氣風で、此の氣風はやがて國民をして、殉難者の追弔と遺族の慰藉を以て其の第一事業たらしめた。姑息なる薩哈噠

の一時占領に満足せしめた。無謀なる智多撤兵に共鳴せしめた。さうして當局者の暴慢なる無責任論にさへ壓倒されて居るといふ始末にした。

四

或は辯護する者あり。如是の現象は寧ろ國民思慮の増進を意味し、既往の如く單純なる感情的行動に出てざるの結果なりと説くも、果してそれが正鵠を得た判断であらうか。固より我國民の爾かく緊張を缺ける一因として、初めより殆んど没交渉の感ありし西伯利出兵の無意義と不徹底とを擧げ得ぬではない。併しながらそれは渾ては無い。如何に出兵の意義が不徹底で、一般と没交渉であらうとも、之あるが故に此の非常事件をいつ迄も沈黙考の材料にするほど、我國民は意地悪でもなからうし、又たそれほど無理解でもあるまい。蓋し、尻港事件の大體は、救援隊の報告以前に於て夙に明白に知れ亘つて居たことである。若し我國民にして幾分尙ほ本來の日本精神を支持して居たならば、此の場合何んてそんな態度を許さう。必らずや事件發生と共に國民の總起ちとなり、熱烈猛火の如き大活動を開始したに違ひない。泡の沸騰しないのは敢て含蓄の意味ではない。實は既に氣の抜けた麥酒に成つて居るのである。慎重なるかの如き悠長さ、決して思慮餘裕との表象ではない。全く元氣衰退の病的兆候である。日本精神の喪失、國家觀念の解體、病根はそれである。

吾人は尼港事件を通して西伯利問題を觀、西伯利問題を通して帝國の現狀を觀る時、其處に一樣なる時代精神の渦巻きを發見する。此點に於て尼港事件は西伯利問題の縮圖であり、西伯利問題は現代的日本の映寫畫である。一言にして云へば、帝國現代の代表的精神は、物質主義である。現實主義である。利害主義である。享樂主義である。従つて國家の政策に於ても、其の基調的精神たる何等の信念と理想とを有せない。故に一定不動の根本方針が立たない。即ち、時に應じ勢に順じて、其の一時の利害を打算し、其の目前の一場を糊塗し、唯だ他動的に追次轉輾するのみである。所謂御座成り主義、其の日暮主義がそれで、現内閣の首相原君が標幟とする、是々非々主義若くは大勢順應主義なるものも、亦た之れに外ならぬ。而して是等の主義は、形に於て様々の名稱こそあれ、歸着する所は一箇の利己主義である。現在の墮落的日本が、日々吾人の面前に提示しつゝある、不信不義、無恥變節、輕佻浮薄、虛偽虛榮、誦詐騙瞞、貪慾暴戾等、あらゆる惡徳の暗影は、悉く此

五

の主義の産物で、今次の臨時議會などは、その物産陳列場として、大いに見るべき價值がある。

六

西伯利問題と尼港事件とは、即ち此の時代精神の具體的反映で、最も自然に描出されたる當世内面の寫生である。但し、此の時代的反映は必ずしも今日に始まつたのではない。吾人は殊に原君の現内閣時代に至つて、内外隨處、益々其の印影の擴大するを感知した。外には媾和會議に、人種問題に、乃至は對支對米各種の問題に、内には朝鮮統治に、財政調理に、將た社會政策に選舉問題に、爾他皆な相應に一様の印影を投げかけて居た。但だヨリ濃厚にヨリ鮮明に色どられたる西伯利問題である。さうして尼港事件に至つては、如上幾多の豫告的反映に對し、吾人の未だ目覺めざるを憤るが如く、一切の時代錯誤を茲に結晶せしめ、これでもかとはばかりに眼前に突き付けた概がある。然り西伯利問題を以て現代的日本の病毒を表示する一箇の大腫物とすれば、尼港事件は其の腫物が吐き出したる一握の膿塊である。ア、時代精神の暴露よ。此の一語は最も適切に評して居る。

吾人は如是觀を以て問題に對する。然る時、其の慘劇に寄する哀悼の情よりも、斯くても尙ほ何等の覺醒だになく、依然として半醉漢の如き我帝國の現状に對し、至の悲哀と憤怒とを禁じ得ない。以下吾人の所論に多少激越の口調ありとも、そは決して故意のことではない。全く良心自然の發動である。

二、事件發生の由來

尼港事件が提示し來る當面の問題は、大體次ぎの三つである。一は該事件に對する善後策、二は事件惹起の責任闡明、三は殉難者並に遺族等に對する措置である。但し第三の問題は公私共に多大の同情を以て最善を盡くすべきを信するが故に、結局吾人の論議に上るべきものは、第一第二の問題である。而して此の二問題を論ずるに當り、先決問題として該事件發生の由來を明かにするの必要がある。何となれば此の原因の研究は、やがて次ぎの問題を解決すべき一切の基礎事業なるが故である。

現内閣の首相原敬君等は、該事件の發生を以て人爲以外となし、宛然不可抗力に屬するかの如き口吻を漏らして居るが、天變地異にあらざる限り、かばかりの大事事件が只だ突然と湧

七

出すべきものではない、所謂蒔かぬ種子は生えぬで、其の間必らずや相因縁し相由來する所があるに相違ない。吾人の見る所を以てすれば、是れは決して天から降つたのでも地から湧いたのでもない。儘かにそこには原因がある。それも甚だ明々白白なる原因である。吾人は今之を遠因近因の二つに區別し、逐次列舉して見ようと思ふ。

先づ遠因として擧ぐべきものは、我が西伯利政策の動搖である。其の無主義無方針である。之を帝國三千年の歴史に問ふも、凡そ今次の出兵の如く、爾かく曖昧不徹底のものありしを聞かず。未だ曾て斯の如く無意義に我神聖なる王師を濫用した例を見ない。而して此一大失策は、そも／＼當初出兵の第一歩に於て、大義名分を誤つたことに端を發して居る。即ち帝國の天職を忘却して自主的基調の上に立つの勇なく、所謂協調主義の奴隸となつて徒らに列國の後塵を拜し、チエツク援助などといふ愚にも付かぬ御題目を擔ぎ上げたのが、一切の根本的錯誤である。

出發點に於ける此の第一歩の錯誤は、爾後到る處に影を曳いて、事毎に矛盾撞着の足跡を印することとなつた。第一に自己の採つた協調的態度が、元と／＼受動的であつて本心

の産物でなかつた爲め、更らに之を實行に證することが出来なかつた。そこで米國と同數の兵を派遣すると稱しながら、忽ち約十倍の大兵を出動せしめ、劈頭早々其の協調主義を裏切つたのである。左なさに排日にうき身をやつして居る米國は、得たりとばかり益々其の宣傳を盛んにする。他の列國も内々驚いて日本の眞意を疑ふといふ始末、爲めに我西伯利問題をどれだけ悪化させたかわからない。やがてチエツク引揚げの終了期となり、列國共に追次撤兵と云ふ一段になると、今まで擔いで居た御題目では駐兵に都合が悪い故、俄かに名義書替へに及び、新たに西伯利の秩序維持、居留民の保護、滿鮮の防衛といふ看板を掲げたのである、而も近く尼港事件の處置と共に愈々西伯利撤兵の廟議を決すると、又候本に逆戻りしてチエツク援助終了を口實とし、折角取りかへた新看板の方は何時の間にか引ッ込めてしまつた。否な引込めてしまつたかと思つたら、今度の米國の抗議に對しては又たそれを出して居るらしい。斯くて其の間或時は過激派討伐の旗幟を翻し、一面反過激派なるコ政府乃至セ軍等を援助するかと思へば、やがて過激派の擡頭、コルチャツクの失脚と共に、忽ち掌を覆へすが如く態度を一變し、局外中立、内政不干涉の新聲明を發

一〇
するといふ有様。何が何やら目まぐるしいほどの變化で、殆んど方角も立たないくらいである。

蓋し、我西伯利出兵の前後を通じて、其處に一貫せる何者かを求め得るとすれば、それは唯だ支離滅裂の四文字に外ならぬ。尼港事件は即ち此間に生れたる禍の兒で、同時に右の四文字に對する代表的説明者である。吾人は斷じて言ふ。若しも我出兵の意義が今少し明白に、其の方針が今少し不動であつたならば、決して今度の様な慘劇は發生しなかつたことを。否らず、責めては尼港守備隊をして最初に受取つた命令のまゝに任務に就かせて置いたなら、あんなみじめな目には逢はなかつたに相違ない。憫むべし、彼等七百の軍民は、我が誤れる政策の前に、何等の了解さへもなく、悉く其の犠牲となつたのである。

次に、近因として重なるものを云へば、第一に、無力且つ無誠意、決して信頼すべからざる彼の出來星の臨時政府などを相手取り、輕々しく局外中立、内政不干涉の新聲明を發し、漫りに妥協停戦を約したるさへあるに、其の態度變更と共に當然用意すべかりし萬一の警備を怠りし事、第二に尼港救援の必要を感知せし後と雖ども、尙ほ時日と方法との餘

地ありしに拘らず、終に其の手段を盡さざりし事、此の二つを數へ得る。

第一に屬するものは、明白に當局の不明と、不用意とを語つて居る。元來浦潮乃至ウエルフネ等の過激派政府なるものは、政府とこそ稱すれ、其の實一部少數の勢力を代表せる一箇の朋黨に過ぎず、之を西伯利全體より見れば、何等支配者たるの實力も權威もないのである。況んや、其の内容をなす首腦人物は、悉く是れ過激派分子で、不義不信、毫も頼むに足らざるは夙に周知の事實である。然るに斯かる徒輩に對し、國際信義を重んずる堂堂たる一國政府と同様の取扱をなし、輕卒にも握手妥協を求めて彼等に乘すべきの機會を與へたるさへ、既に奇怪至極のことなるに、尙ほ且つ此の信すべからざる者を信じ、平然として彼等が背信的行爲に備ふるの用意を缺くに至つては、言語道斷、沙汰の限りと云はねばならぬ。現に當時彼等の背信的計畫は、獨り尼港のみに止まらず、浦潮其他各地に於て一般的に認められたればこそ、我軍は一齊に起つて其の武装解除を強要したのではないか。近くは黒龍州所在の過激派が、今次の妥協に對し、是れ吾人が日本撤兵迄の一時的權宜のみと公言して居ることや、ウエルフネ政府が緩衝地帯設定に關して停戦を約束しなが

ら、我足もとを見透かして早くも裏切りの行動に出でつゝあることに照らしても、彼等の心理状態は終始一貫、今も昔も同じことである。いかに自分の方が猫眼的に變化すればとて、これほどのことが了解されて居ない筈がない。

假りに、政策の變更は已むを得なかつたとしても、當局者にして此の間多少の注意を加へ、豫め尼港の警備に對して相當の手段を講じて置いたならば、何んであんな不祥事が起らう。まして尼港不安の豫感は、前年守備隊の半減以來益々同地に充満し、只さへ増援の必要を感じて居たのである。然るを何等の用意なしに、突如として方針一轉と共に過軍との妥協を命ぜられた結果、我守備隊は俄かにこれ迄の協同者たりし白衛軍とも分離し、茲に各自の勢力を滅殺して、さなきだに薄弱なる勢力を一層薄弱ならしめたのである。これは恰も兩軍が相互にバルチザンの毒刃に料理せらるべく、俎上に置かれた形で、今次の慘劇に對する準備行爲といつてもよい。果然、バ賊は仕済したりとばかり得意の荒料理に取掛かつた。先づ白衛軍は殘忍極まる虐殺の下に、一舉全滅といふあはれな最期を遂げた。さうして我守備軍は身の毛もよだつ此の地獄の活畫を眼前に眺めながら、絶對不干涉と言

ふ鎖鎖に束縛されて手も足も出し得ず、武士道どころか、一般の人間道さへ皆な打捨てたまゝ、ひざ／＼と昨日迄の友軍を見殺しにした。而かも、此の慘劇は獨り友軍にのみ見舞はなかつた。忽ちにして順番は自分等の上に廻はつて来て、同じ運命の筈に突き落されたのである。殊に惡戰苦闘の間に生き残つた我百餘の勇士が、日本男兒最期の一戦に死花を咲さうとした時も時、又たしても停戰命令の天降りに無限の痛恨を忍びつゝ、終に降伏者同様武器を奪はれ牢獄に投せられ、あらゆる大侮辱を加へられた末が、一同生きながらに焚き殺されたといふあの始末である。何といふみじめな運命であらう。

當時の事情を綜合して考へれば考ふるほど、おぞくも過激派に一杯喰はされたといふ感じが、強くなるばかりである。同時に我當局者の迂濶さ加減が腹立たしくてならぬ。彼れバルチザンは一箇の盜賊的集團で、我等の關係以外であるなどと、過激派政府は空とぼけて居たが、それは彼等が慣用の虚言で、相互の間一道の氣脈を通じて居たことは、毫も疑ふの餘地がない。且つ尼港に向つたバ軍の一團は、今のウエルフネ政府の首腦者たるクラスノヒチヨコフの部下で、曩きに智多方面に於て我鈴木師團に撃破された敗殘の一群であ

ると聞いて居る。遮莫、油断が渾ての大敵である。吾人はバ賊の兇暴を惡むよりも、先づ我當局者の不用意を憤らざるを得ぬ。若し吾人に春秋の筆法を許すならば、我軍民七百の生靈を屠りしものは、是れバ賊の毒刃にあらず、却つて我當局者の迂濶也と大書するであらう。

第二に屬するものは、當局者の不忠實、不親切を示して居る。政府側の辯明では、本年一月末、尼港よりの報告達する迄は、何等不穩の兆候もなかつたので、今度の慘事は全く意外の突發事件なるかの如く吹聴し、例の不可抗力説を匂はして居るが、これが第一に事實を偽つて居る。尼港不安の豫感の前にも記した如く前年來のことで、近く益々險惡に赴きつゝありしは、幾多の事實の證明する所である。現に内田外相も貴族院での追究に逢うて、尼港領事より受取つた最初の電報は、一月十七日なる旨を自白し、政府側の前言を打ち破つて居る。もつとも、外相は此の自白と共に、其の電報は何等救援を求めて來たのではないと繕つて居るが、果してどうか、これは一應その電文を發表して貰はぬと、容易に信用が出来ぬ。新聞紙の素ッ破抜く所では、外務省が改削しない以上、其の電文の内容は「居

留民引揚げには今日ならば充分其の方法がある至急訓電を俟つ」との意味が明記されて居る筈だと、確信を以て斷言して居る。之を事實とすれば、假令、直接救援の言なくとも、内容は矢張り一種の救援要求である。今日なら引揚方法があると云ふ言葉は、其の地の不穩が居留民引揚を感ずる程度迄に増大して居ることを、明白に語るものではないか。若し斯かる電報に接しつゝ、尙ほ救援要求の語なきが故にとの理由の下に、何等の顧慮を用ひざるに至つては、そは常識を缺ける低能兒か、然らざれば責任觀念を有せざる不忠不義の徒である。更らに三宅少佐からは、早くより本國政府に對して増兵要求を繰返して居たことである。政府側の辯明は事實を曲げて居る。我國民の多數が其の辯明に承服せぬのも當然である。

領事の電報の著したといふ一月十七日から起算しても、事件發生の三月十二日迄に約二ヶ月、我無電通信所の砲撃された二月五日から數へても、尙ほ約四十日の日子はある。然るに政府側の申し開きの如く、此の間に於て爾かく絶対に救援の方法が取れなかつたらうか。彼地の事情に通せるもの、言によれば、尼港救援の道筋、即ち哈府より黒龍江を下る

もの、デカストリーに上陸し、マリンスク方面より黒龍江を下るもの、北樺太より氷上を渡るもの、三通路は、皆以て頼るに足るので、其の進軍の可能性を證明して居る。或は冬期結氷の故を以て行路難を口實にする風あるも、結氷は却つて一面に彼地交通の援助者として露人は盛んに此上に活動するのである。

聞く所によれば、我大井司令官は當時中央部よりの救援命令に對し、哈府より尼港へ二百五十名の一隊を輸送するに四十五日間を要するが故に、寧ろ不可能事なりとして答申したとのことであるが、此の兩地間には五十餘箇の驛場を有し、郵便の如きは橋にて五日乃至一週間に到着するといふに、これは又た餘りに甚だしい相違である。果して何を基準に如上の計算をしたのか。殆んど諒解に苦しまざるを得ぬ。假りに彌次喜多一流の見物旅行で、四十五日を要するとしても、一月十七日領事よりの着電當時、速かに救援行動に着手すれば、實際に間に合つて居るではないか。否らず、尼港救援は我同胞七百を死地に救ふの非常事件である。同時に帝國の面目に關する大問題である。若し、眞に熱誠と勇氣とにあらば、如何なる方法を講じても必らず其の目的を達すべき筈である。現に仇敵バ賊の

一團も翼あつて天を翔けつたのではない。皆な地上を踏んで來たのではないか。又た當時何等の仕度もない二百の邦人は、事變を聞くと共に直ちに北樺太より大泊迄の二百餘里を、各自糧米を背負つたまゝ安全に突破し得たではないか。苟しくも日本軍人に其の誇りとする大和魂あらば、斯かる場合に救援不可能など、澄まされた義理ではなからう。

更らに二月十三日に出動命令に接した旭川師團が、派遣隊一切の準備を整へ、同廿日小樽に於て既に三隻の運送船に分乗せしめ居たるに拘らず、突如として出動を中止したといふ事は、果して何を意味するのであるか。若しも此の中止が途中俄かに救援不可能なるを知つたが爲めであるとするれば、それは餘りに輕率粗漏な出動計畫である。吾人は如何に當事者を輕視するとしても、所詮かゝる馬鹿氣た行動のあり得べきを信ぜぬ。必らずや、他に何等かの事情が存在したに違ひない。吾人は此の點に就いて、當時尼港に於ける我軍と逸軍との妥協成立の一報が即ちそれであつたらうと、茲に推定すべき理由をもつて居る。少くとも此の出動中止が輸送不可能以外に原因して居るだけは明白である。果して然らば、當局者も亦た尼港救援の可能性を信じて居たとより外か思はれぬ。是れ能はざるにあ

らず爲さるる也である。所謂、不可抗力論は於是明かに自殺を遂げて居る。

敵の無線電信を通じて來る情報を唯一の頼みとし、其の間何等の顧慮をも用ひずして直ちに我行動の標準とするが如きは、餘りに愚かなる大膽さである。驚くべき非常識な態度である。而かも如是は寧ろ事に不忠實に物に不親切なるの結果と見るが至當である。彼の海軍側が陸軍側の請求を拒絶し砲艦の一隻だけに留めて置かなかつた事は、代表的に此の不忠實と不親切とを説明するもので同時に内部の不統一を物語つて居る。然り、吾人は尼港事件を通じて遺憾なく當局者間の不統一を見るを得た。而して此の不統一が如何に救援上の障害物なりしかは嘸々する迄もない。然るに此の不統一の人々が、昨今事件に對する責任回避の一段になると、さても見事を協同一致の結束である。吾人は此の前後兩様の現象を對照する時、痛切に彼の如き不祥事の偶然ならざるを感じ、云ひしれぬ淺ましさに、思はず涙さへこぼるゝのである。時代の悪化と人心の墮落、禍は皆なそこに醸される。

三、自明の責任問題

如上事件發生の由來を知れば、責任の歸結は既に自明の問題に屬する。即ち一に西伯利對策の根本的錯誤、二に動搖常なき方針の轉換、三に方針の變更に伴ふべき用意の缺乏、四に救援の可能を不可能たらしめし怠慢、凡そ是等の主要なる條項は如何に曲庇せんとするも誣ふべからざる顯著的確の事實なる以上、現内閣が其の責任を負はずして何者が受けよう。問題は直截簡明である。一目瞭然である。

然るに、驚くべきかな。原首相以下當然の責任者は、斯くばかり明白なる重大問題に對し、未だ一人も眞面目に其の衝に當らんとするもの無きのみか、却つて我れ勝ちに責任回避の態度に出でんとして居る。尤も原君等の強辯曲解は殆んど其の持病で、曩さには不逞鮮人呂運亨等を忠良なる善人なりと主張し、彼の禁苑拜觀事件まで惹起した程である。想ふに、今次の事件に對しても亦た同一筆法を用ひ、飽くまでも驚を烏と云ひくるめん所存てがなあらう、卑怯未練といふよりもこは寧ろ傍若無人の振舞である。天と人とを無視したる我執暴慢の悪行である。事ここに至つてはモハヤ責任問題にあらずして良心問題である。吾人の論鋒も斯くて茲に一轉し、彼等の人格問題より引いて風教問題に入らねばな

尼港事件の天災地殃ならざることは、いかな原君等と雖ども到底抗争し得ざる事實である。既に天災地殃にあらずして人事的範圍の出来事なりとすれば、あれほどの大事件に對し、天下一人の責任者なしと云ふ、そんな不思議なことが何處の世界にあらう。まさか、原君等とても、其の全責任を取つてバ賊の兇暴と單なる運命とに轉嫁せんとする氣でもなからう。假令、それとした所で、其のバ賊なり其の運命なりの手から我同胞を救ひ得なかつた責任は何人の上に在る。

原首相等は口を極めて當局者の渾てに手落ちなかりしことを出張して居る。流石に例の不可抗力論は誤傳なりとして一應之を取消したものゝ、其の後、議院内應答に於て、不可抗力とは云はぬが不可抗力みたやうなものといふ、甚だ愛味な口吻の下に陰然其の素論を復活し、一切を盡くして何等の遺漏なく過失なきが故に、職務上責任を負ふべき理由なしとの意を、大膽にも放言して居る。敢て反問す、何等の遺漏なく過失なくして、何が故に如是の珍事出来せしや。若し、首相の言の如くば、それは人爲以外である。實に不可抗力

である。原君は何も其の不可抗力論を引込めるにも及ばないのである。抑も尼港の守備隊は何の爲めに派遣したのであるか。チエツクの居ない場所にチエツク援助でもあるまい。要するに過激派に對する我同胞の保護が眼目であらう。然らば豫め其の目的に副ふだけの警備を何故に整へなかつたか。不時の救助も出来ない孤立無援の地に、なせ我軍民を放棄して置いたか。或はこれ豫期以外なる不慮の出来事なりといふか。其の豫期以外、其の不慮が、直ちに見込違ひといふ自己の不明を立證して居るではないか。況んや、今次の事件は何人も豫想し得た所で、唯だ怠慢なる者、不忠實なる者に於てのみ不慮の出来事なのである。これが遺漏でなく過失でなくて何であらう。若し特に常識と良心とを缺いて居ない普通の人間ならば、單に此の一事を以て迫るも、職責上責任なしなどと放言することは、絶對に出来ない筈である。

首相等の責任回避論の基點は、要するに一月下旬迄は尼港不穩の情報に接せざりし事、既に救援の必要を知りし時は、交通閉塞と時日切迫との爲め終に如何とも爲す能はざりし事の二つで、殊に後者に向つて専ら力を注いで居る。従つて其の辯明の範圍は吾人の前述

せし各種の原因中、近因に屬する一部分だけで、それ以外には及んで居ない。即ち事件發生後の應急措置のみを主眼とし、最も主要なるそれ以前の問題には觸れないのである。これは恰も低級なる藪醫者が當面の對症療法のみを云々し、更らに根本療法に想到せざると一般で、如是の辯明は初めより何等の價値を付すべきものでない。まして、其の辯明の爲めの辯明で、故意に事實を誣ひたる點さへ少からず、糊塗彌縫の痕跡殆んど見へ透くばかりである。吾人如何に愚と雖ども、斯かる詭辯の下に翻弄せらるゝものではない。

吾人は繰返して言ふ、責任問題の要部は却つて首相等の言及せざる事件發生以前に存在する。先づ吾人が遠因として擧げた西伯利出兵當初の根本的錯誤、即ち自主的出兵を排して協調本位の他動的出兵たらしめしものは誰れであつたか。當時外交調査會委員たりし原敬君は實に其の張本人ではないか。更らに爾かく中途に政策を轉輾し、毎に方針を動搖せしめしものも、亦た原君の率ある現内閣ではないか。原首相は斯くて本件に對する最初よりの責任者であり。同時に其の中心人物である。併しながら、現實主義の權化、其の日暮らしの代表者たる原君等にあつては、如是の遠因などを説いても、何等感覺する所でないかも

知れぬ。但だ最も直接に最も主要なる近因として吾人の提示した、政策變更に伴ふべき用意の缺乏てう一事に至つては、現實家の原君等も無感覺の問題とするわけにはいかぬ筈である。何が故に尼港安定の確信もなきに濫りに守備隊を半減せし乎、何が故に不信の過激派に對し輕卒なる妥協を要求せし乎、何が故に其の方針變更と共に豫め他の背信行爲に備ふるの手段を講究せざりし乎、吾人は此の點に就き更めて原首相等の明答を促がしたい。而かも首相等は此の最も主要なる部分に對し會て一言も觸れないのである。さうして、我同胞の全滅により所謂死人に口なきを幸ひ、とかく水掛論になり易い事件發生後の手續を主題として、飽く迄過失なし遺漏なしと云ひ張るのである。これは原君等が顧みて他を云ひ問題の中心をそらして問題を決せんとする狡猾の手段である。問題そのものには没交渉である。唯だ瞞着以外、何等の意義もなき三百的辯明である。

原首相は屢々議會に於て、責任問題につき感情上と職務上との區別を云々し、感情を以て法規上の責任觀に混同してはならぬと主張して居る。これは例の不可抗力論を半面より説明したもので、職責上の手落なきことを強辯するの意に外ならぬ。併しながら、議會の内

外を問はず、尼港事件の責任糾弾に關し、苟しくも如是單純なる感情論を以て首相等に迫つて居るものが果して幾人あらう。吾人の知れる範圍では、其の責任論の渾てが悉く職責上より立言し、當局の曠職を主眼として居るので、そんな漠然たる感情論に據つて居るものは一人もない。然り、吾人が前段に列擧したる一切の原因は、原君の所謂感情問題に屬するものではない。最も明白に職務上の過失を指摘して居る不神の事實である。然るを強ひて此の事實を無視し、どこまでも責任を回避せんが爲めに、爾かく手製の感情論などを振り廻はすさへあるに、其の良心を無視せる虚偽の感情論に立脚し、只だ此の見地よりのみ 陛下に對し恐懼するといふが如きは、言語同斷の沙汰で不謹慎の極みである。蓋し、原君の如き強辯家は、古今東西を通じて殆んど其の比を見ない。強ひて之を求むれば、支那に於て僅かに一人を得るに過ぎぬ。昔、馬を指して鹿となした趙高其の人がそれである。前日議員の一人は、西にレーニンあり東に原敬ありの警句を吐いて、多數與黨の爲めに懲罰に付せられたが、吾人は世界の強辯家として、昔の支那に趙高あり今の日本に原敬ありと云うてみたい。

想ふに、三百式論法を得意とする原君の頭腦よりすれば、何等かの法文上具體的に自己の行動を否定せざる限り、無責任論を主張し得るものと心得て居るのだらう。それは法律家が如何に罪惡の事實ありとも法文に抵觸せざる以上無罪なりとする行き方で、辯護士の職業的辯論には相當の態度かも知れぬが、一國の宰相として斯かる量見の下に百政を料理されてはたまつたものでない。政は誠也といふが本體である。元來が移動性な法律、不備的な法文は、只だ此の本體を基調とせる立法の精神によつて活用せらるゝ時、初めて意義を全うするのである。誠とは天地の大道、自然の法則である。之を知得し體現するは常識に充てる良心の力である。私心と邪念とを振り落したる良知良能の作用である。畏こけれど 陛下の大御心は即ちそれで、我國體そのものも亦た此の現はれに外ならぬ。従つて輔弼の職に居る原首相等は、當然の責任として唯一に此の根本觀念に立脚し、造次頓沛自己を大御心に對する執行代理者として一切に對立せしめ、斯くて益々聖徳を明かにせねばならぬ筈である。而かも原君等の態度は一向そんな風に受取れぬ。所謂三百の雄なる者との感はあるが、聖徳の代理者など、いふ感は殆んど片影だに認め得ない。若し原首相等に

して幾分たりとも右様の觀念があつたならば、今度の様な明白なる重大問題に對し、爾かく圖々しき責任回避の強辯などは出來ない義理である。原君等は自己辯護の三百式論法を以て、動もすれば感情々々と感情を盲目者扱ひにして居るが、感情の盲目的なるは理智を離れた時のことである。道理に和合した感情は正しい心の表彰である。人間にこれが無ければ禽獸にも劣るわけで、所謂人非人の心は此の調和を缺いた畸形の心である。大御心は即ち此の人非人等の畸形の心を矯正する爲めに、我國體と共に無窮に傳道する天地の至寶で、其の聖徳は原君等の蔑視せんとする感情の泉より湧出するのである。民をいつくしむこと慈母の赤兒に於けるが如きは、我歷代天皇の一貫せる所である。寒夜御衣を脱して民の疾苦を思ひやり給ひ、御身は貧しくも民の竈の賑ふに満悦の情を寄せさせ給ふといふ、是れが御心の尊き感情の表示である。否らず、天變地異の如き眞の不可抗力の出來事に對しても、尙ほ責を一身に負うて蒼生の爲めに祖神の御前に謝し給ふといふが大御心である。原君等にして多少とも此の種の感情を共有し、一度想ひをあの不祥事件の上に走せ、七百軍民の無殘な最期や、悲惨な遺族の境遇やに考へ及ぼしたならば、決して昨今のやうな態度で

は居られぬ筈である。小兒が過つて溝に落ちてさへ親は監督上の責任を痛感する。小學の一訓導でも生徒を救はんが爲めに水に投じて、尊き責任觀念の犠牲たるを辭せなかつた。而かも輔弼の職に居る原首相等は、尼港事件の如き責任所在の明白な重大問題に對しても、唯だ責任回避の強辯を逞しうするだけである。さうして感情論はいけなるとばかり、木石漢の如く冷然として傲語しつゝある。吾人は前にバ賊の殘忍の鬼畜に過ぎたるに驚いたが、今は更らに原君等の氷の如き心理状態に對し、より以上の驚異を感じずには居られぬ。免れて耻なしとは人心腐敗の極度を示す標語であるが、原君等のその生きたる標語として出現せるかの概がある。而かも此の種の人が大御心の取次人として國政の中心に立ち傲然として天下に號令するの結果に想到すれば、吾人は思はず膚に粟を生ぜざるを得ぬ。風教の荒廢人心の潰滅は亡國の第一要素なるが故である。

田中陸相が同じく此問題に關して、二枚舌或は三枚舌、甚だしきは四枚舌などの世評を受けしことも、其の代表的地位よりして、帝國の花とし誇れる日本武士總體の名譽を汚辱せる感あり。近頃以て淺ましきことどもである。某將軍は頃日公務上の意見衝突により自

殺したとの噂さであるが、陸相にしても、日本武士の眞骨頭を有するならば、軍刀の手前如きは侮辱に甘んずることは出来ぬ筈である。もつとも、田中君はその何枚目の舌であつたか、最後に臣節を盡くすとの一句を明言した爲め、貴族院あたりでは今に君の引責辭職を期待して居る様であるが、昨今の模様では此の期待もどうやら貌に喰はれさうで、又ソロ／＼舌が一枚追加されるのではないかとも思はれる。臣節を盡くすといふことは、他人の言によつて其の責任觀念を出したり引込めたりすることではない。今度の様な場合には、良心の命するまゝに先づ罪を上下に謝して其の責任を明かにし、然る後全力をその善後策に傾倒するといふが順序である。傳説によれば、陸相は初め流石に引責辭職の決心をして居たのであるが、陸相は引責はやがて内閣の破滅なればとて、終に首相に説伏せられし結果、爾かく幾枚の舌を出すに至つたのであると云ふ。此の説果して眞なりとせば、陸相は大義を辨ぜざるの人である。公私を混同するの人である。内閣は原君等の私有物ではない。公なる政治の機關である。當然引責すべき理由あらば、直ちに辭職して内閣を後賢に譲つてこそ、政道は明かにさるゝのである。陸相の引責によつて内閣が瓦解したとて、それが何

であらう。困るといふのは原君等の朋黨的私事ではないか。國家の爲めには慶すべきを知るも何等憂ふべき理由を見出さぬではないか。

併しながら、それもこれも皆な公私の顛倒からである。私心が先に立つからである。此の見地から推すと、陸軍を我物顔に振舞ふ長閥の代表的人物田中陸相が、朋黨的代表人物として現はれた原首相と相抱擁するのも、左迄不思議なことではない。寧ろ似合はしい道伴れかも知れぬ。現に問題の西伯利出兵に就いても、大井司令官を初め、大庭、藤井、栗田の三師團長並に大多和兵站部長等、當時出征軍の首腦者は孰れも長州出身の連中はかりで、中途閥外の鈴木五師團長を派遣したのは、以上の外もはや長閥の師團長がないからだと迄云はれて居る。更らに最近薩哈噠占領軍の首腦となりし兒島將軍も歸化長閥で有名な人で、此の看板の下に實權を握つて居る津野參謀長も、亦た同じく長人である。それも適材適處ならまだしも、他により以上の適材はいくらもあるといふに、餘りに露骨な振舞である。これでは寧ろ長閥の爲めの西伯利出兵であるといふ沙上の偶語や、長人にあらざれば軍人にあらずとの嘆聲やが、外部よりも却つて内部より起るといふも無理でない。一説

に、右の如き長人専門の西伯利出征軍は、自然長人代表の田中陸相を中心とし、直接關係の參謀本部などは殆んど眼中に置かないといふ風で、其の爲めの不統一が、どれだけ一般の行動を阻害して居るかわからないとのことである。原君が多數をたのんで政界に傍若無人の振舞をするのと、長閥が山縣公を挿んで爾かく陸軍部内を引ツかき廻はすのと、兩々對照し來れば全く私心本位の同一行爲で、舞臺こそ違がへ、舞手こそ違がへ、舞踊の手振りは同じである。こんな風では山縣元老もさう原君ばかりの攻撃も出來まいし、たとひ、攻撃してもお手元拜見で押しがきくまい。陸相がグラブしつゝ、いつも首相のお伴をして行くのも、要するに此の私と私との結合に外ならぬ。

元來を云へば、田中陸相は當初寺内内閣の下に自主的出兵を主張し、原君の協調主義と戦つた人である、従つて其の主義主張からすれば、今度の撤兵などには飽くまで反對の態度を持すべきは勿論、同時に消極政策の産物たる尼港事件に對しては、率先して引責辭職の擧に出づべきが當然である。然るに、軍刀の手前もあらうに、二枚舌の三枚舌のと大侮辱を蒙りつゝ、尙ほ斷乎たる處置をも取らず、依然として其の日暮らしの原宗に歸依しつ

つあるは、情けない軍人である。明治大帝は特に軍人精神の教養に心し給ひ、勅諭を下して其の標準を示されて御座るが、代表的軍人の地位に在る陸相の態度がこんな工合で、果して此の聖慮の徹底が期せられるであらうか、こんな生きたお手本を頭にいたゞいて居る軍隊に、所謂日本武士の魂が養成されるであらうか。これは確かに軍隊精神の死活問題である同時に大なる風教問題である。

吾人は更らに上原參謀總長、加藤海相、内田外相等に對しても亦た大いに論すべきものあるを知つて居る。併しながら黨閥軍閥の二代表者を中心に如上の説をなした上は、モハヤそれには及ぶまい。殊に内田外相の如き一箇の通り者には、何事があつても物申さうとの氣にもなれぬ。但だ茲に一言を添へて置きたいのは、世間の一部で、或は此の責任糺彈を不急の問題なるかの如く云々し、故意か無意かは知らず、之を以て直ちに政争の具に供するものゝ如く吹聴する痴者のあることと、初め脱兎の勢を以て迫りし貴族院が、やがて處女の如く問題を有耶無耶にしたこととである。抑も、これほどの重大事件を不急の問題とするは、世人に一切の責任觀念を捨てよといふものである。綱紀などは無用の儀なりと主

張するものである。そんな非常識なことは無政府主義のレニン君でも想ひ着かない所であらう。又た政争の具云々は、只だ政府側の防禦的宣傳としてのみ受取れる話で、萬一眞面目にそんなことを主張するものとすれば、それは餘程の愚物である。失政の糺彈すべきを糺彈する、これほど當然のことがどこに有らう。民智が進めば進むほど其の働きは増大されるに極まつて居る。況んや反對黨として直接監視の地位に立つて居る政黨が、相手の責任を糺問するに何の不思議があらう。それが政争故に悪いとの意義なら、お味方以外一切の人間をして一切の政治に喙を容れさせぬ様、此の世の建て直しをする外はない。原君の様に横車をおして、無理に政争の具にしてこそ悪かれ、尼港事件の様な明白な問題で、當局の責任を問ふのに何處に無理がある。これしきの道理は三歳兒と雖どもわきまへて居る察するに政争の具を云々する輩は、恐らく悉く政府側の宣傳者であらう。利慾に集つた所謂犬の種類であらう。

貴族院が折角追詰めた手を弛めたのは、首相が陛下に對して恐懼に堪へずと云ひ、陸相が臣節を盡くすと云うた、此の二つの言明を信じて、近く首相以下の引責辭職を期待した爲めである云ふ。若しそれが事實であれば、餘りに原君等を見損じた所謂お人よしの扱方である。果せる哉。原首相は昨今傲然として内閣の居据りを聲明し、辭職したくも引責すべき理由がないなどと空嘯いて居る。成るほど、原首相は明かに恐懼の一語を吐いたに違ひない。さうして此の恐懼の一語は呂運亨事件で陳謝した恐悚の意義よりも一歩進んだものに相違ないが、首相は同時に一面に於て職責上何等の手落なきことを言明し、従つて此の恐懼なるものは首相の所謂感情上の問題に止まるの意味を暗示して居る。即ち不可抗力なる天災地殃に對しても、猶ほ臣が不徳の致す所なりとして已れを責めると同様の意味に於て云へる恐懼である。例の三百式を得意とする原君は、爾かく豫め遁途を開いて居る今日洒蛙々々として少しも恐懼の様子などのないのは、此の人に於いて尋常の茶飯事である。陸相の臣節云々は、前後の關係やら、圖々しさがまだ原君ほどの徹底して居ない所やらで、多少脈がある様ではあるが、元來がいやく／＼ながらの中腰であるから、後楯の原君の指金次第でどうとも成る。こんな當てに成らぬ連中の抽象的な言語に満足し、其引責辭職を豫断して追究の手を引くなどは、寧ろ迂闊の沙汰である。假令、彼等にして尙ほ多少

の徳義を存し、やがて引責するものとしても、其の故を以て事を曖昧に附するは決して正當の行動でない。公私は混淆してならぬ。果して彼等に失政の責任ありとすれば、飽く迄も徹底的に之を糺弾し、大義を明かにして政道を正すが本筋である。況んや、彼等は傲然として引責の理由なきを公言し、何等慚悔の心もなく謹慎の状もないのである。蛇はなま殺しにすべきものでない。曖昧の間に彼等をして其の跋扈を繼續せしむるは、所謂民をして免れて耻なきに至らしむる所以である。吾人は前に呂運亨事件に於て貴族院の不徹底を経験し今又た尼港事件に於て之れを繰返すを見て、益々頼みなき世の様を痛嘆するばかりである。

専らなる世間の噂では、如是上院の現象は其の多數勢力を代表せる研究会を中心にあらゆる利益上の取引が行はれた結果だと云うて居る。或は臺灣の山林問題に、或は證券交換所問題に、或は大連取引所問題に、地位やら金やらの様々の好餌につられての軟化が其の眞因であると云うて居る。吾人は成るべくこんな噂は信じたくない。併しながら研究会などが兎角慎重といふ勿體振りの下に、世の疑惑を招く様な曖昧な態度を示して居るのは事實である。苟なくも、皇室の藩屏などと稱し、社會の儀表として上位に居る貴族連が嘘にもこんな噂を立てられる様になつては、愈々どん底の世の中である。上下交々利を征すとは亡國史上吾人の毎ねに觀る不快の文字である。

論じ來つて如上記述の跡を顧れば、悉く是れ惡徳と惡徳との交錯である。所謂時代精神の暗影は茲にも一樣に推しひろげられて居る。然り、此の責任問題の經緯は、恰かも利己主義といふ毒蜘蛛の腹から繰り出した一箇の蜘蛛の巢の様なものである。さうして彼の權勢利祿の好餌につられて惡政を助長せしあつゝある輩は、丁度この蜘蛛の巢に引つかつて居る昆蟲の類である。斯くて現代の代表者たる原内閣の下に病的日本の産物として現はれたる尼港事件は、其の責任問題によつて益々現實暴露の色彩を鮮明にした。天は我國民を救はんが爲めに、これでもかこれでもかと爾かく根氣よく警醒の材料を與へて居るが、國民はまだ容易に覺めさうにもない。或はこのまゝ昏睡状態に陥つて、どう／＼天道様に愛憎をつかされるのではないかと、それが甚だ恐ろしい。

四、姑息の善後措置

尼港事件の善後策も、亦た前段記述の事件發生の由來により自然に説明せられる。即ち事件の根源が爾かく我が西伯利政策の錯誤に存する以上、先づ此の錯誤を除去して適切な政策に建て直すと云ふが、善後措置の根本義であらねばならぬ。従つて該事件は之を一箇の單獨問題として全體より切り離すことなく、やはり西伯利問題の一部として取扱ふが順序である。然るに、當局者は全く此の方針に反して事件を一切より分離獨立せしめ、薩哈噠州の一時占領を以て之に應ずると同時に、一面後貝加爾州の撤兵を敢てした。さうして此の姑息の小策に得意の様子で、我七百軍民の亡靈を以て瞑するに足るなどと、内々放言して居るさうであるが、犠牲に供せられた我同胞こそよい面の皮と云はねばならぬ。

吾人よりすれば、尻港事件は天の我國を警醒せんが爲に下したる一大荆鞭である。當局者にして茲に多少の心眼を開き得たならば、直ちに天與の好機として之を捕捉し、從來の誤れる他動的方針より解脱して自主的方針の本性に立還り、正々堂々西伯利の大局を調理

し、自他共に救ふの義舉に出づべきである。然り、平和、人道、正義の上に立脚して、過激派の到底我れと兩立すべからざる所以と、寸毫の野心なき我が公正の態度とを宣明し、列國をして容喙干涉の餘地なからしむると共に、少くとも過激派を極東の天地より一掃して眞の露西亞人をして代つて堅實なる統一政府を樹立せしめ、動搖より安定に地獄より極樂に、一面直ちに多數良民の艱苦を救ひ、一面他日、露西亞復興の素地を作らしむるといふが、第一義の大策でなければならぬ。斯くて無意義なりし我西伯利出兵も有意義の王師に復活し、我對露策の眞面目も發揮せらるゝに至らば、是れ所謂禍を轉じて幸となし得たもので、茲に初めて我七百の英靈も亦た以て瞑するに足ると云ふことが出来るのである。而して此の大策の遂行は、當時決して至難の業ではなかつた。若し、當局者にして確乎たる決心だにあらば、敢て新らたに大兵を動かす迄もなく、從來の派遣軍を主力とし、之に反過激派軍を策應をしめただけでも、略々其の目的は達せられたのである或は更らに増兵の必要ありとするも、現在の派遣軍を戦時編成に改むるだけで澤山で、それ以上の大仕掛には及ばないのである。西伯利統一の大事業にこれ位のことは何んであらう。寧ろ帝國に取

つては一舉手一投足の勞のみと言ひたい位である。

是如の見地よりすれば、薩哈噠占領の如きは大道商人のそれにも比すべき最もケチ臭い現金取引きて、却つて有らざるがなのことに屬する。何となれば、如上の大策だに遂行せば、ヨリ大なる報償が、將來に於て必らずや談笑の間に決せらるゝが故である。よしや爾かく一部占領の必要ありと假定するも、それは只だ大策に併行すべき當面一時の臨機處分として、なければならぬ。然るを全然別問題に切り離し、此の枝葉の末事を以て唯一の善後策と心得局部的に膏肓貼りに得々として、却つて肝腎の根本策を放棄し、時もあらうに此の場合敢て西伯利の撤兵までも實行し、益々帝國の威信を失墜せしむると共に、多年の苦辛によつて折角扶植した我勢力を、宛然弊履の如く一擲して、俄かに居留民の引揚げを命ずるなど、以ての外のこともなるに、よくも我七百犠牲の亡靈がこれで浮ぶなど云へたものである。所謂細作小才の徒の小細工がそれで、豎子大事を誤るは毎に此の種の姑息手段にある。

聞く所によれば、政府今次の善後措置は、其の權勢維持上最も焦慮した事で、薩哈噠の占領により不取敢激昂せる國民の公憤を緩和するの傍ら、一方撤兵により事件を西伯利問題以外に分離して列國の手前を繕ひ、兼ねて國內撤兵の俗論に迎合して人氣取りの一策となし、且つ撤兵軍の費用を以て新占領軍の費用に流用する。其のやりくり算段まで加味されてのことであると云ふ。現實主義の權化として大勢順應の名の下に、其の日暮らしの政策を得意とする原君等の内閣としては、如何にも相當な考案で、此の説恐らく真相を傳へ得たものであらう。

殊に今度の撤兵は、相變らず中途半端な遣り方で、意義甚だ曖昧である。蓋し、チエック還送と共に列國撤兵以後の我軍駐屯の名目が、西伯利の秩序維持、居留民の保護、滿鮮の防衛といふことに成つて居る以上、撤兵の口實として、今時分只だチエック援助終了だけでは間の抜けた話である。所謂證文の出し後れてある。従つて今次撤兵の理由は、如上三條件の目的達成を以て主眼とせねならぬが、それが果してどうであるか第一に疑問である。否な多くを語るを要せず、現に我軍の撤退する處、悉く我居留民の引揚げを見るといふ一事だけでも明かに其の目的の未達成を立證して居る。未だ其の目的を達せざるに先

だち中途爾かく撤兵するとは何の意義ぞ。そこに何等か特殊の理由を明かにせざる限り更に筋道が立たぬではないか。而かも、當局者は此の點に關して吾人を首肯せしむべき何の説明をも與へない。不徹底である。無意義である。それでは、只だ前聲明の裏切りだけである。或は例の猫眼主義の十八番として、今度は又たチエツクの古看板に建替へ、之を以て其の口實を充てるつもりかも知れぬが、それならばそれで、何故に單り後貝加爾州のみの撤兵を試みたか。何故に西伯利全部の撤兵を行はなかつたか。當局者の辯明によると今次の撤兵の全部に及ばざるは、西伯利の實情がまだそれだけの程度に達せない爲めである、即ち一は薩哈噠の新占領地擁護と一は滿鮮防衛との上より、尙ほ浦潮、哈府其他の要地に駐軍せしむる必要があるからだと云ふ。之に依ると、上記チエツクの古看板の建替と共にモハヤ引込めたものと思はれて居た、西伯利の秩序維持、居留民の保護、滿鮮の防衛といふ第二の看板は、やはり引込められた譯でなく、其の場の都合次第であちこちと使ひ分けられて居るものと見え、こゝで再び顔を出して來た。其の儀ならば吾人も亦た繰り返して、何故に後貝加爾方面の居留民に引揚げを命じたかと問ひたい。それとも今度は秩序維持と居留

民保護とを抜きにして、單に薩哈噠並に滿鮮の防衛といふ新看板を出すつもりであるか。果して然りとせば後貝加爾の撤兵は猶更以て聞こえぬ次第である。何となれば此の地は極東西伯利咽喉の要衝で、若し薩哈噠乃至滿鮮防衛の意義が過激派の脅威に存する以上、第一に扼守すべき地點なるが故である。既に此の要衝の關門を撤して過激派の進出を自由ならしめ、西伯利の天地を赤化せしめた後、浦潮若しくは哈府の駐兵が果して能く如上の目的を達し得るや、智者を待つ迄もなく何人も其の結果を判断し得るのである。斯く詮じ詰むれば、今次の撤兵も亦た甚だ條理の明晰を缺いて居る。例によつて例の如く唯だ當面糊塗の場當り策としか思へぬのである。彼の米國の抗議的質問の如きは、其の排日政策より來れる故意の一手段たること勿論なるも、彼をして爾かく乗ぜしむる所以のものは、我れに於て斯かる矛盾と缺隙とを有して居るからである。渾ての破綻は姑息と彌縫とに發する。さうして、此の姑息と彌縫との間屋は原君等の現實主義である。如今收拾すべからざる内外の政局は皆之を説明しつゝある。

併しながら吾人の怪しむものは、此の當局者の態度よりも、寧ろ之に對する世間の有様

である。吾人の知れる限りでは、如是姑息の善後措置に向つて、世間の多數は更らに抗議を試みんとするの風もない。否らず、却つて之に満足し、殊に撤兵の如きは進んで賛意を表はして居る。所謂時代思潮の俤は斯くてあり／＼とこゝにも漂うて居る。現實主義は獨り原君のものではなかつた。現代即ちそれであつた。吾人は筆の次手に一矢を此の俗調の撤兵論に加へて置かうと思ふ。

五、浮薄なる撤兵論

同じく撤兵論といふ中にも色々な意義があつて、必らずしも一樣でない。今試みに分類すると、協調本位の外交論が其の一、勞農政府抑制不可能の見地より寧ろ握手を得策する功利論が其の二、國力の負擔に堪へずとする財政論が其の三、一種の思想上より用兵を罪惡視するものが其の四、從來の如き不撤底の出兵は有害無益なりとするものが其の五、出兵に伴ふ軍閥の増長に對する反感が其の六と、大體こんなものになる。さうして、是等の意見は或は單純に或は相抱合して各自に鼓吹せられ、終に今日の如き一大俗論の合奏とな

つた次第である。併しながら此の合奏は、悉く音律の亂れた上ツ調子の聲ばかりで、少しも吾人の傾聴に値するものがない。

第一の外交論は只だ帝國の宿痾として吾人の最も痛嘆する我が軟弱外交の延長と云ふより外、何等の意義をも持たぬ。やれ軍國主義で候の、やれ第二の獨逸で候のと、左なきだに排日的傾向の盛んな今日、何時迄も西伯利に駐兵して無い腹迄探られ、此の上列強殊に近頃、目の仇にしていぢめたがる米國などの御機嫌を損じては、それこそ大變であるといふが此の説の主旨で、相も變らず紙袋の猫同様後しざりばかりして居るのである。而かも此の後しざりの一步が即ち他の乗する一步たるを解しない。現在繼子扱にされて居る我國國際的孤立の境遇も亦た畢竟此の後退外交の結果なるを覺らない。さうして難を避けんとして却つて危きを致すべく、益々袋猫先生の尻込法に學ぶなどは、滑稽といはゞ云へ、寧ろ傷ましき一種の悲劇である。近く之を例して、媾和會議以來支那に南洋に米國に西伯利に爾かく續發せるあらゆる我外文の失態は、皆此の滑稽的悲劇の復習に外ならぬ。要するに正義の前には千萬人と雖も、我れ往かんといふ一心さへあれば、こんな愚かな真似をせんで

もよいのであるが、兎角此の連中の頭は物質的で、内に基調とすべき自主的的信念もなければ外に他の心事を讀破するの明もなく、一に眼前形式の打算を旨とするが故に、事が渾て間違ふのである。かういふ見當違ひの撤兵論は、米國あたりでお譽めに預かるかも知れぬが吾人に取つては所謂獅子身中之蟲である。

第二の功利論は利口振つた所に餘程當世向きの感がある。過激派政府はモハヤ倒れない。よしやレニン等は倒れても、政府は漸次穩健化して、そこに露國の統一と復活とを成就するに違ひない、現に兵力を以て彼れを制するの不可能を知つた列國は、皆其の手を引きつゝある。然るを我國獨り之を強行するも、そは唯だ國力を浪費して露人の反感を買ふといふに過ぎぬ、それよりも寧ろ握手して我が利益を計るが得策ではないか、レニンは既に其の意を漏らして我を迎へんとして居る。且つ不安なる我が將來の國際關係よりするも、今日露國との握手は他日の大計に對して有利の素地を作るものであると、これが大體の論據らしい、此の主張もやはり前論同様、根柢に於て國家の主義精神を無視した利害本位の現金論である。成るほど英國などは今や一方過激主義を排斥しつゝ、一方に勞農政府と握手

せんとするが如き矛盾の行動を取つて居る。併しそれは恥づべき窮餘の權道で、決して正當の態度ではない。今日の彼れは戦後の整理で再び露國と戦ふの餘裕もない上に、内に勞働團體の牽制やら、外に植民地に對する過激派の脅威やらで、實際手も足も出ないのである。所謂背に腹はかへられぬと云ふ境遇から仕方なく、そこは物質文明の御國柄だけに早速態度を一變して花より團子の利害打算に出たのである。我國の立場は立場が違ふ。何もそんな筋の立たない間違つた窮策などを真似する必要がない。日本には建國以來の立派な精神がある。日本は唯だ此の大精神に基準してのみその生命を見るのである。此の見地よりして果して過激派と握手が出来るかどうか、それはちやうど水と火との握手を望む様なものである。元來過激派政府の主義主張は、直ちに國家社會の破壊と世界平和の攪亂とである。其の行動は全く鬼畜の殘忍と兇暴とである。彼れと我れとの對立は單なる感情や利害の上ではない。深く思想上に根ざして居る。其の争は正義と不義人道と非人道との對抗である。然るを一時利慾の爲めに此の根本精神を賣るなど甚だ以て卑しむべき所行である。吾人は露西亞と争ふのではない。過激派といふ露西亞の破壊者、世界平和の攪亂者と争ふ

のである。吾人は決して露西亞人を惡むのではない。人類の敵として起てる彼の惡魔を排斥して、眞の露西亞人の露西亞にしてやらうと云ふのである。不義の前に屈する罪惡たるは不義を取て臨むの罪惡と同一である。惡魔と握手するは惡魔に對する一箇の援助者である。義を輕んじ利を重んずる現代の所謂文明國では、算盤次第で泥坊とも握手しようが渴しても盜泉の水を飲まない日本魂は、不義の榮華に楽しむよりも、正義の犠牲となつて斃るゝを快とするのである。功利主義の撤兵論などが出るだけでも、既に日本精神の墮落を意味する。

過激派政府はモハヤ倒れないなどと云ふは、暗夜の一現象を見て世界はモハヤ闇黒に成るといふに均しい。不自然が自然を制服するといふに等しい。抑も露國今次の革命は猶ほ佛國昔日の革命の如しである。佛國王政のダントンを喚起し、露國帝政のレニンを招致したるは、共に同一經路をたどれる當然の因果關係で、そこに何等の不思議もない。而かもこれ物平を得ざれば必らず鳴るの反動作用である。反動作用は平調を求むる爲めの一時的現象に過ぎぬ佛と露と其の國狀の差異に相應して、革命の收拾方にも多少の趣こそ異なれ

やがて平調に復歸すべきは必至の勢である。現に露西亞多數の民心は此の反動作用の激動に堪へず、一日も早く平調に歸せんことを祈りつゝあるではないか。レニン政府の倒壞は一に時間の問題である。それも餘り遠くない問題である。或は説者の言の如く、レニンは倒るゝも政府は穩健化と共に存續するとせんか、それは反動の平調に復する時で、其の政府はモハヤ今日の所謂過激派ではない。狂氣から正氣に歸つた政府である。日本の立場は彼等の狂氣を正氣に歸らせてやらうといふのである。正氣になつた彼等の政府が、何んで如是日本の行爲を惡むことが出来よう。吾人の恐るゝ所は覺醒する露人の正しき反感である。狂亂せる露人の勝手な反感などは、少しも顧慮する必要がない。但だ爾かく慘澹たる今日の反動期を短縮し、成るべく速かに平調期に入らしむるは、露國救済上、當面の第一義であるが、これは吾人の反過激派行動の如何が至大の關係を持つ。今やレニンは半ば物資掠奪の目的と、半ば對外的人心統一の目的とを以て、連りに外邊に侵入し、死者狂ひに暴ばれ廻つて居る。此の間周圍の關係者が、唯だ目前の利害によつて事を處し、此の暴ばれ者の御機嫌を取る様では、露國復活期の長引くと共に、列國も亦た其の毒氣に惱ま

れねばならぬ。日本は獨り自衛の點からでなく、人類共存の上より、義として彼等との握手を許すべきではない。若し夫れ將來の我が對英米策の素地を作すが爲めに、今日豫め彼れと握手すべしといふが如きは、要するに一箇机上の空論に屬する。假令、將來に於て如是の必要生ずるとするも、それは過激派より醒めたる復活後の露國に對することである。根本に於て融合すべからざる彼れと我れとが、何によつて永久の握手が出来よう。況んや功利本位の手練手管は、日本といふ正直者の柄でない。其の點になると、流石物質宗のよそ様は、孰れを見ても、皆二三枚の上手である。自分だけで握手した積りで居ると、やがて町内で知らぬは日本ばかりなりなどと、世の物笑ひになるのが落ちである。

第三の財政論は、現金主義の今日、殊に人を動かすの恐れがある。併しながら此の主張の標準が一體どこにあるのか、全露西亞を日本一手で征服するといふなら、吾人と雖ども少々首をひねらぬでもない。併し今日の問題はまだそこまで往つて居らぬ。只だ極東西伯利だけのことである。此の範圍から云へば、國力の負擔に堪へぬなど、そんな業々しい巨費を要する理由がない。十分に仕度して從來の派遣軍を戰時編成に改め、其の兵數を倍

加した所で高の知れた話である。それも一時的のもので其のまゝ永久に駐軍するわけではない。一年もかゝれば形が付くのである。即ち反過激派と策應して過激派を貝湖以西に一掃し、そこで囊の口をしめて、専ら内に極東露國の基礎を堅めるといふ策に出る。かうなれば、日本は眞の徹兵が出来るので、其の後は兵器と物資との援助さへしてやれば事足りるのである。今日の様に申開きの口實に苦しみつゝ、何時迄もわけのわからぬ半撤半駐の生煮的態度を取るよりも、結局此の方がいくら經濟的か知れない。曩きにコルチャツクの失敗したのは、先づ其の脚下を堅めずして、一気に歐露を制せんとした爲めである。オムスクなどに政府を置いて、直ちに中央に進出せんとした爲めである。これではレニン等も自己の死活問題であるから、極力反噬せざるを得ない。若し極東に限局して、直接歐露を脅かすの恐れなしと見れば、彼れの現在の境遇上、此の方面に迄さう多くの勢力を割くことは出来ない。將來は知らず、目下の所では、彼等の眼中には西伯利などはどうでもよいのである。こゝの呼吸をよく呑み込み、範圍を貝湖以東に局限して反過激派の統一政府を建設し、先づ經濟狀態の改善に力を注いで、各自生活の安定を圖つてやれば、多數の良民は

救ひの神として渴仰するに極つてゐる。斯くて、約五六萬の軍隊さへあれば一帯の警備も出来、日本軍などの駐屯はモハヤ入用がない。或る西伯利通の調査によると、後貝加爾以東三州の統一さへつけば、今日のまゝでも年に四億圓近くの収入が見込まれる。若し日本人などの手で之を整理してやつたら、更らに巨額の年收を得るは明かであると云うて居るが、經濟的から見た西伯利は決して捨てたものでない。そこで、日本は此の極東新政府の後援かた／＼共通經濟の方法を講ずる相互の利益は其の間一層の親密を加へるといふ段取りで、ケチな薩哈噠の差押などをせずとも、此の手で行けば好意と共鳴との裡にいくらか報償の道が開けて來るのである。或は米國などが例の岡燒の小言を云ふなら、門戸開放でどし／＼投資させるが宜しい。結局は、こちらの利益をこそ増せ、損をする氣づかひはない。成るほど、從來の如き無意義の出兵に、年々一億からの死金を使はれては泣言の出るも無理はないが、かういふ風の使用される生金なら、財政即ち政治と心得て居る先生方でも、寧ろ欣んで支出に賛すべき筈である。吾人は此の上正義人道の精神論を繰返すに及ばない。單に慾得づくの經濟眼からしても、今日の撤兵は全く愚策である。之によつて既往

の投資を減殺するのみならず、併せて將來の利益をも放棄するのである。所謂一文惜しみの百損とは此の事で、財政論としての自殺である。

第四以下の意見は寧ろ附録的のもので、前論に較べると實力もなければ、議論としての價值もない。従つて吾人も單簡に一言して置くことにする。先づ一種の思想から來て居るものは、基督教かぶれの間違つた道德觀念や、近頃流行の社會主義の見地から云々するものもあるが、米國などの宣傳に致され、用兵即罪惡、出兵即侵略といふ様な誤想から、撤兵に共鳴するたわいも無い連中の方が多い様である。思想上の問題は吾人他日の機會に於て別に大に論じて見たいと思ふから、此所には一々辯じない。但だ此の際、注意すべきは此の種の撤兵論の中には、非國家的精神の多い事と、或は他の走狗となつて帝國を攪亂せんとする非國民的醜類の混在を疑はれる事である。次ぎに從來の出兵を標準としての撤兵論は其の惡標準を改善すればよいわけで、其の見地よりすれば撤兵よりも出兵の意義を正すのが順序である。最後の軍閥増長云々は一種の感情論で、問題其のものとは別事である。而かも議論にならない此の感情が、大部彼處此處と潜伏して、間接に撤兵論に油を注いで

居るのは事實らしい。軍閥から云へば是れも當然の應報では非ない儀であるが、國家から見れば、そんな御相伴は迷惑の至りである。

要するに今日の撤兵論は、一として確乎たる根本的基準を持つて居ない。肝腎な日本といふ自己の本體にも何等の覺醒がない。唯だ此の俗論によりて吾人に得る所ありとすれば其の消極的萎縮的なる點に於て、其の現實的功利的なる點に於て、其の模倣的迫隨的なる點に於て、益々明白に時代精神を看取するの一事に過ぎぬ。吾人は更らに撤兵の影響に就き一言を加へ置く必要がある。

六、重大なる惡影響

撤兵は一面明かに過激派に對する降伏を意味する。既に西伯利の秩序維持、居留民の保護、滿鮮の防衛を聲明しつつ、何等其の目的を達成せざるに、忽ち態度を一變して撤兵の舉に出づるは、事實上過激派に對する一種の敗退でなくて何であらう。殊に尼港の一撃に空前の凌辱を受けつゝ、尙ほ敢然として蹶起するの勇もなく、故さらに問題を分離局限し

僅かに薩哈噠の一時占領によりて目前を糊塗するさへあるに、半面同時に後貝加爾洲の撤兵に着手して其の撤兵意思を證明するに至つては、寧ろ降伏の語を以て評するの適當なるを感じる。尤も英國なども當初の反過激派的態度を一變し、今や、此の降參組の魁けをなして居るのであるが、全然立場を異にせる我國として、如何に盲從本位の協調が能事とは云へ、降參のおつき合ひ迄するとは、情けないにも程のあつたものである。而して此の降伏が齎らす觀面の影響は、先づ過激派に對する精神的援助と、反過激派に對する精神的打撃とである。換言すれば、人道の破壊者の得意増長と、正義の孤忠者の失望萎縮とである。是れ鬼心を助けて佛心を抑へ、やがて、此の世を地獄に導かんとする其の第一歩でないか。斯くて相踵いで來るものは西伯利の赤化と、それを足場としての東洋の大攪亂たるは言はずともわかつて居る。

レニン等の徒輩は初め東洋に於ける主義宣傳に關し、日本を唯一の勁敵として頗る畏懼して居た。従つて彼等の羽翼全く成るまでは、努めて此の勁敵との衝突を避くるの方針を取り、精々緩和策を講じたのである。彼の緩衝地帯の提議などは其の一例で彼等の腹の中

では、場合により一時西伯利などは敵手に委ねて置いても、寧ろ歡心を買うて銳鋒をそらした方が得策位に考へて居たのである。然るに其の後敵手の様子を見ると列國に遠慮ばかりして少しも徹底的態度に出で得ない。國內でも人心の弛解と共に撤兵論が勢を爲すといふ工合なので、こんな調子ならど、段々脚下を見すかし出した。ウエルフネ政府を中に近頃共産黨連の我儘な振舞は全くそれに外ならぬ。今次の撤兵は即ち此の心裡状態に對する一大獎勵で、之によつて更らに力づきし彼等の増長と跋扈とは、蓋し想像に餘りある。吾人は明かに豫言し得る。彼等は此の場合、先づ得意の宣傳により、露人といはず、支那人といはず、朝鮮人といはず、其の渾てに對し、宛然、自己の力によつて日本軍を驅逐せるかの如く吹聴し、日本の到底頼むに足らざるを知らしむると共に人心を己れ等の上へ傾け、勢を驅つて直ちに智多政府の覆滅を計り、茲に東洋唯一の反過激派として、飽くまで孤忠を守りつゝあるセミヨノフ軍の根城を奪取せんとするに相違ない。彼等にして一度此の關門を破り得たとすれば、今迄そこに堰き止められて居た西部飢渴の狼連は、何はさて置き、其空腹を満たすべく、忽ち群をなしてなだれ込む爲め、西伯利全土は一層の速方を

以て、見る／＼赤色化してしまふであらう。斯くて、勢の成るに従ひ、一面宣傳によりて益人心を惑亂し、一面武器を與へて、不逞の鮮人、無頼の支那人等を煽動し、やがて滿鮮に向つて其の毒手を伸ばし來るは、彼等が豫期課程である。事ここゝに及んでは、如何に無關心な昨今の我國民でも、モハヤ此上じつと我慢して居るわけにはいくまい。尤も米國の犬ではないかと思はれる様な滿鮮放棄論者さへ、ちよい／＼現れる世の中ではあるが、まだこんなものに制せられる程腐りきつた日本でもないから、必らず對抗手段として再度の出兵となるは、自然必至の勢である。但し、此の再度の出兵は、今までの様なお手輕ではすまない。すつと大仕掛の大兵を要するものと覺悟せねばならぬ。無意義な鼻先思案の撤兵をしたばかりに、厄介千萬な難局を招致し、更めて多大の犠牲者と巨額の國帑とを提供するといふこんな馬鹿氣た話が何處にあらう。吾人は關係當局者は勿論、撤兵に唱和せし一般の俗論家に對しても、斯かる場合、又もや責任回避の奥の手を出さぬ様、豫め堅く約束して置きたい。

如上は吾人に於て火を睹るより明かな豫言であるが、假令、事の俄かにこゝに至らざ

るまでも、今度の様な撤兵は、撤兵それ自身が既に我が國威の失墜を意味するの結果、之が爲めに受くる影響だけでも、決して少小のことではない。さなきだに大戦以後の日本は西力東漸の復活と共に釣瓶落しの如く、其の勢威を失墜しつつある。即ち米國の太平洋政策を中心に、あらゆる排日分子が結合して、支那に、南洋に、西伯利に、將た朝鮮にまで到る處我が行動を阻害するといふ有様、之を戦前に比すれば地位の顛倒寧ろ驚くべく、正しく一大逆轉をなして居る。而かも此の爲體は例の他動的な我が退嬰方針が招いた結果で云はゞ自業自得である。我れの退一步は他の進一步である。こちらが頭を下げれば下げるほど、向ふは笠にかゝる。こんな調子で、いつ迄もつゞけるなら、それこそ支那問題どころか、やがて滿洲も朝鮮も或は臺灣も、悪くごまつけば、琉球さへ熨斗をつける様なことに成るかもしれない。日本もモウ大抵に眼をさまさねばならぬ。此の上の國威失墜は益々際限なき他の増長を馴致するばかりである。想ふに、今度の撤兵も此の意味より單に西伯利に於ける過激派の跋扈を助くるのみならず、直ちに支那の排日運動に油を注ぎ、朝鮮の獨立運動に熱を加へて、今後一層の紛糾を來たすに違ひない。爾他一般の國際間に及ぼす影

響などは云はずもがな、これだけでも、なんぼう五月蠅いことかわからぬ。

更らに今次の撤兵に智多政府に對する背心行動として、日本を一種の道徳的罪人に陥れたこれは我が國體上見逃し難き一大問題である。日本人としては實に忍ぶべからざる耻辱である。蓋し、反過激派を標榜せるセミヨーノフ軍と當初より其の後援者なりし我れとの關係は、夙に世間周知のことに屬する。現に責任の衝に在る我當局者某々等は、必らず彼等の目的を達せしむべく誓言して居た。然るにも拘らず、何等豫め彼等に諒解せしむることさへもなく、其の政策變更と共に忽ち弊履の如く捨て、顧みないなどは、武士道にあるまじき振舞で、全く信義を無視したる無情の行動と云はねばならぬ。吾人は曩日彼等の仲間よりサムラヒの國、武士道の國として心より尊信せし日本が、爾かく掌を蹶へすが如き態度に出でようとは、夢にも豫期し得なかつたとの一言を聞き、思はず赤面した次第である。我等の祖先は、武士に二言はなきものとはばかり、信義を中心に最も食言を耻としたものであるが、今は武人の代表者ですら、二枚も三枚もの舌を持ちあるく時節柄、吾人の様な主張は所謂ふるい、舊思想として、新人とやらの連中より野暮扱にされるかも知れぬと、國

家であれ、個人であれ、こんな薄情な仕打に對して、誰れが敬意や信用を拂ひ得よう。近來は、殊に親善ばかりで、一にも親善二にも親善と殆んど國際的標語をなして居るが、一方にこんな不實な眞似をしながら、如何に國際信義の押賣をしたとて、誰れが眞面目に相手にならう。それもセ軍の方に絶縁せられるだけの缺陷があるとか、或は國家の利害休戚上、非常な關係でもあると云ふなら、まだしもであるが、少しもそんな理由さへなく、唯だ利己的な眼前一時の小策に由來するのだから耐らない。さうして結局の收穫はと云へば過激派の跳梁を助長して益々局面を悪化すること、折角信頼して居る眞面目な露國人を失望の極、反感と共に他に走らしむること、其の輕薄なる態度により國際信義上天下の指彈を受くること、唯だそれである。吾人をして云はしむれば、日本は一に此の精神的天分に於てのみ誇り得るのである。之を除いて他に何の誇りがあらう。然るを、今次の撤兵は、此の唯一の誇りを毀損せんとする。此の日本の魂を破壊せんとする。若しこれでも、尙ほ何等の影響なしと云ふほどなら、我國三千年の歴史などは、あらゆる世界の神佛諸共、一東して火中に投するがよい。

元來、セミヨーノフはコルチャツクより正式の手續の下に、極東政府の主權を繼承したのである。従つて主義の上よりコルチャツク政府を支持したる列國は、其の延長としてセミヨーノフ政府を後援せねばならぬ義理がある。假令、列國は功利本位の打算を旨として形勢と共に轉輾するにせよ、日本だけは飽迄正義本位の武士道を發揮し、此の邪慾の暗黒世界に對つて、一道の光明を示すべき筈である。然るに、此の根本の理義を無視し、相變らずの大勢順應主義で、列國殊に英國などの現金な陋態に見習ひ、忽ち友を賣つて敵に親しむの手段に出で、過激派の傀儡たる浦潮政府を中心に、例の緩衝地帯の設置に没頭するといふ風で、何處までも偷安姑息の小計を繰返さんとするのである。而して此の小計の遂行上、反過激派のセ軍は寧ろ一種の邪魔物なるが故に、近來は漸次壓迫的態度を以て、之に對し、或は彼れの自滅を希望するかの感さへある。傳聞する所によれば、所謂、浦潮派の名稱ある大井司令官を始め、松平政務部長等は、何の故かセ軍に對して兎角好意を持たなかつた。さうして、此の人々は當初よりセミヨーノフの到底爲すに足らざるを豫言し、其の見地より中央部へも種々意見が提出されて居る。所が、此の豫言は爾後段々と裏切られ

て来た。即ちセ將軍は今や東洋唯一なる反過激派の首領として、ともかくも、後貝加爾州に一政府を樹立し、過激派に對して儼然たる一敵國をなすまでに發達したのである。若し彼れにして更らに其の志を伸ばすことゝなれば、前の豫言家は見込違ひといふことで、甚だ器量を下げる。第一中央部に對しても面目ないと云ふわけである。吾人はまさか、こんな行掛りの片意地からセ軍を押へるものとは思はないが、世間では、かういふ事情も手傳つて居はしないかと、皮肉な觀察をする向きもある。想ふに大井司令官等の對セ軍觀は恐らく其の日常接觸する周圍の關係からで、つまり過激派傾向の浦潮の空氣が産んだわけであらう。殊に同地の外交界で幅をさかして居る、英、米側からの排セ軍論は、追従主義の我が官憲氣質に對して、一番効驗の多い魔藥であつたに違ひない。而かも、セ軍の英、米側に受けの悪いのは、やがてセ將軍の親日主義を反證して居る所以である。何處迄も親日の一本調子で、他の誘引に應じなかつた結果である。蓋し、セ將軍の親日は、列國の利己本位に愛憎をつかして、此の上は唯だ日本に頼るの外はないと決心したコルチャツクの申繼ぎからばかりではない。彼れ自身が昔から其の主義で居たのである。將來は知らず、今

日迄の彼れは、爾かく心より日本を信じ且つ頼んで居たのである。こんな男が、あゝした岡燒連中に持てる筈がない。即ち浦潮はじめ到る處、英語の通ずる限りに於て、此の岡燒論が宣傳せられる結果、自然それにかぶれて、豫言家なども出来上つたわけであらう。併し、かういふ風に間違つた出先きの報告が、何時も中央部立案の基礎となつてはたまつたものではない。事情通は云つて居る。從來内地に傳へられた西伯利事情の多くは、排日を目的とした猶太人、過激派、米國人並にそれに操縦されたチェツクなどの宣傳に依つたものである。恐らくそれは事實であらう。さうして、所謂、浦潮派の先生方は、此の宣傳の取次人として大分骨を折つた連中らしい。

當局者は、今や緩衝地帯の設置を以て西伯利問題の解決となし、爲めに極東統一政府の樹立に向つて全力を擧げて居る様であるが、一體、昨今のやうな姑息な方法で西伯利問題が解決されると思つて居るのか、それとも、之によつて唯だ一時の小康でも得ようとして居るのか、所存のほどが承りたい。若し、眞面目に緩衝國を設置して、日露間の楔子にする積りなら、其の緩衝國の内容は、全然相互間の局外中立を守り得べき素質を以てせねば

ならぬ。然るに目下當局者の進捗せしめつゝある極東統一政府は、質に於て依然たる過激派中心である。従つて、假令此のまゝ成立して見た所が、其の統一政府なる者は、如何に外觀を粉飾するにせよ、要するに、事實に於てレニン政府の一支店たるに過ぎぬ。如是ものが果して緩衝國としての實を擧げ得るであらうか。日本の目的に投合するであらうか。それは所謂、木に縁つて魚を求むるの類である。日本の立場より云へば、寧ろ此の組立を逆まにし、反過激派分子を主體とするが當然である。又たさうでなければ、實際上堅實なる統一綜合も望まれない。或は吾人の邪推かも知れぬが、當局者の西伯利各派に對する態度は、初めより小黨分裂主義を原則とし、其の一派の優勢を嫌ふと共に、一切を思ふがまゝに操縦せんとするの風がある。是れは往年支那問題に於て、南北同時の援助の下に渾てを操縦せんとして失敗した所謂官僚的小細工と同一筆法である。其の結果は、やはり前轍同様、一切の怨嗟と反感とに歸すべきこと、今より豫想に難からぬ。

七、根本的一大革新

吾人は尼港事件を通じて西伯利問題を觀、西伯利問題を通して帝國の現状を觀る時、そこに同じ時代精神の渦巻きを見ると云うたが、如上の記述は之を證明し得て十分と思ふ。試みに此の見地に立つて一箇の鳥瞰圖を作らば、國家的にも社會的にも將た個人的にも、現代日本は一切の現象は、悉く此の渦巻きによつて描き出された同一圖様の配列である。然り、今日吾人の眼前に紛糾せるありとあらゆる、内外大小の問題は、皆な此の同一精神を中心とせる波紋の重疊錯綜に外ならぬ。西伯利問題も尼港事件も畢竟其の波紋の一つで、別に孤立したものではない。ヨリ強き刺激を以つて代表的に出現した迄である。それは現在の墮落政界を代表して政友會が出現し、政友會を代表して現内閣が組織され、現内閣を代表して原君が起つて居るのと同じことである。枝は様々に分かれる。葉は様々に茂る。そこに數々の花も咲き數々の實も結ぶが、本をたゞせば一條の根幹である。政友會といふ枝に原君といふ時めく花が咲き、西伯利問題といふ枝に尼港事件といふ恐ろしい實を結んだのも、やはり時代といふ一條の根幹からである。瓜の蔓に茄子は生らない。同じ時代の蔓に生つた原君と云ふ代表的人物の下に、尼港事件といふ時代的問題のぶら下つたのは、極めて自

然な現象と云はねばならぬ。而かも極めて自然な此の現象の半面に、吾人は云ひしれぬ一種の皮肉と訓戒とを痛感する。同時に時代に對する憎惡と反感とが熾となつて燃える。

時代精神の暴露、此の一語は實に帝國今日の世相を唱破し得て適切なるものである。問題に既に部分的でない。總體的である。局所病でない。全身病である。もはや、區々の膏藥貼りでは如何ともしがたい。根本的に全身療法を要求する時が來たのである。此の點に於て西伯利對策も尼港善後策も他の一切の問題も皆な平等で、個々の解決即ち總體の解決であらねばならぬ。然らば、其の根本解決をどうすればよいか、それは病根である所の腐り切つた現代精神を驅除して、健全なる新精神に取りかへるより外に道はない。つまり時代改造の唯一方法たるは自明の理であるが、さて、何を基調に改造するか、何を標準に新精神を作るか、これが事實上の中心問題である。

蓋し此の案件は結局一の大なる思想問題に屬する。従つて之を詳論するには別に一篇をなさねばならぬ。吾人は他日筆硯を新にして其の起草に着手すべく豫期して居る故に茲には煩を避けて只だ大體より一言するにとゞめる。そこで該案件解決の順序として、先づ着

眼すべき點は、如何にして眼代の成立を見し乎、如何にして斯かる墮落的時代精神を馴致せし乎といふ、由來と歴史とである。乃ち此の考察によつて、其の原因を明かにすれば、自然とそこに解決の道筋が開けるわけである。此の點に對する吾人の所見は、要するに、明治維新後の國策が、全然基準を誤つて居た事、それが渾べての根本的原因であると思ふ。成るほど、開國進取は頗る結構であつた。文明開化も御尤もの儀ではあつたが、第一自國本來の文化がどんなものであるか、眞面目に自他の比較研究さへしなかつた位だから、そこに何等の自信も自覺もあらう筈がない。唯々物質文明に驚愕し眩惑して、一にも舶來、二にも舶來と無上矢鱈に歐米の模倣に傾倒した結果、一切萬事が他動的追従となり、自主的精神の喪失となり、所謂、ハイカラの跋扈と共に外來思想の全盛を招來し、やがて、個人主義より利己主義と化して國風を破壊する處、終には動々もすれば、國家の基礎をさへ揺がさんとする現代を造り上げたのである。畢竟、是れは外來の新文明を攝取するに當り、先づ其の消化器たる胃囊の用意をせずに、手當り次第貪食した靦面の罰で、如今病的日本出現の一大動機は、爾かく一に維新當初の基調錯誤に懸かつて居る。

原因既に茲に明かなる以上、時代改造の基調を、原君等の大勢順應主義に採るわけには参らぬ。何となれば、此の他動的追従主義こそ、基調錯誤の繼承者で、今更、之によるは益々悪化時代の色揚げをするに過ぎぬからである。それならば、昨今流行物の一つに成へて居るらしい、媾和歸りの新人とやらの改造論はどうか、それもとんと感心の出来ないシロ物である。何となれば、彼等も亦た戦後一層民衆化し闘争化せる他の新形式に學ばんとするだけで、其の基點はやはり同一傾向の歐米本位なるが故である。さらば、何處に我が時代改造の基調を求むべきか。何ものを其の新精神の標準と爲すべきか。道は遠からず近きに在り。吾人は此の間に對し、先づ汝の脚下を見よと大喝するものである。斯くて明治維新當時に取忘れられた一番肝腎な自己内省により、自己の何者たるかに覺醒し、然る後自他の比較研究を遂ぐれば、そこに吾人の要求する基調的精神が、さながら雲間を出づる月の如く、明皎々と照り亘るを見るであらう。日本建國の大精神が即ちそれである。然り、吾人の基調は吾人自身が持つて生れた唯一なる此の實以外には無い。唯だ自然に歸らしめよ、唯だ日本に還らしめよ、唯だ日本人に還らしめよ。是が一切解決の基準である。

吾人の先輩が曾て最優等のモデルとして熱心に寫生した歐米の物質文明も、吾人の眼よりすれば其の實一個の不具的文明たるに過ぎぬ。之を心理學的に云へば、智意を代表した文明で、情的方面が缺けて居る。三足に立つべき鼎が二足しかない。否な、無いではない有るにはあるが、其の一足は他の發達にくれて短かいのである。つまり、ピッコの鼎である。彼等の所謂文明社會が常にガタ付くのはそれ故である。而かも此の不具的文明は彼等の境遇が然らしめたので、祖先以來間斷なき其の強烈なる生存競争といふ母胎から産れた、あはれな不具兒である。彼等の歴史は渾て是れ一卷の闘争史と云つてよい。人間の戦に於ての第一要求は、智力であらねばならぬ。さうして意力であらねばならぬ。此の要求に應じて發達したのが彼等の文明である。彼等も同じ人間である以上、素質に於て殊に無情なものではなかつた。但だ如上の關係で此の方の發達が他と並行することが出来なかつたので、どう／＼片輪になつてしまつた。實に氣の毒千萬である。彼等は恐らく意識しないであらうが、其の鷹の如き鼻、其の獅子の如き眼、其の鬼の如き巖丈の巨軀、是等は皆な彼等が傳統的闘争の遺産に外ならぬ。會々、反動的に基督教の如きものが現はれて、其の

調和を取らうとしても、彼等の根づよい祖先傳來の勢力は、容易に感化が出来ない。今度の大戦も、戦後一層激しくなつた階級闘争も、やはり同一歴史の繰返しで、其の傳統的勢力の延長である。要するに、彼等の文明は、如是修羅の世界に産出した一つの修羅的文明に過ぎない。彼等が物質主義となり、個人主義となり、利己主義となるのは、當然必至の結果と云はねばならぬ。然るに、日本はそれを文明開化の御師匠様として、一から十迄真似たのである。今日の爲體を見るはあたりまへである。

日本建國の大精神は、こんな片輪ではない。二本足で立つて居る様な不安全な鼎ではない。チャンと二本共に揃うて居る。智、情、意の圓滿具足により人格の標準を教へ、文化の見本を示して居る。和魂(ニギミ)奇魂(クシミ)荒魂(アラミ)の共調を意味せる三種の神器は、端的にそれを説明する。學者の一説によると、凡そ日本人くらゐ混雜した血液を持つて居るものは、世界何れの國民にも見ないと云ふ。其のあらゆる異種族を打つて一九とし、茲に最も和合せる六千萬民の一大家族を造り上げた、殆んど奇蹟的の大事業は、果して何の力であるか。是れ即ち三徳圓滿の大人格として譽められた建國の精神の働きである。他が缺

いて居る情的方面の具足により、一切を徳化した結果である。日本の國體は此の大精神の具體化したもので、それを現實に代表せられて居るのが即ち天皇の大御心である。物質文明の産んだ憫れな不具兒等は、己れの立場より個人主義の上に天皇を解釋せんとするが、日本の天皇は、天祖以來一貫せる如上大人格の表現で、個人的に個々に繋ぎ合せたものではない。是れは建國の大精神そのまゝの現れである。國體そのまゝの現れである。同時に天地にあつては天地の大道であり、人にあつては人道である所の宇宙自然の大法則の現れである。従つて、天皇の大御心は、吾人一切の基調であらねばならぬ。否な、單り吾人と云はず、渾ての人類の基調であらねばならぬ。否々、禽獸草木有情無情を問はず、天地萬物の悉皆が此の大御心を基調として、始めて宇宙の大調和をなすのである。大自然の法輪が圓滑に回轉されるのである。

日本は此の意味に於て、修羅の巷に迷ひつゝある現代の人類に對し、鬪争より平和に、自利排他より自他一如に、一切を共存の原則に安定すると云ふ一大天職を持つて居る。吾人は決して獨りよがりのち國自慢をするのではない。事實上世界各民族の間に、唯一なる

此日本の具足せる國體を發見する時、そこに天意の甚だ昭々たるを知るのである。若し、此の自覺の上に立ち、大御心を基調として日本を日本に還らしめ、日本人を日本人に還らしめ得たならば、今日爾かく我れを惱ましつゝある不具的文明も、忽ち我が大御心に融化されて完全なる人類文化の資料となり、自他共済の至寶となるのである。朝鮮文明も嘗てさうであつた。支那文明もさうであつた。印度文明もさうであつた。歐米文明も亦たさうであらねばならぬ。嗚呼、偉なる哉、大御心よ。文に處る者、此の心に居るべし。武に處る者此の心に居るべし。政治家も、教育家も、宗教家も、實業家も、學生も、労働者も、男も女も、凡そ日本人といふ日本人は悉く此の大御心を基調とせよ。是れ所謂分業の綜合である。やがて自己人格の完成である。やがて君民一如の實現である。天下は一人にして興るとさへいふ。それは天意を負ひ自然の法則に推された一人なるが故である。我が六千萬の國民が此の自然の法則たる大御心を基調とし、一致團結して天職を遂行するに當り、何もかの能く之を阻止し得ようぞ。

今や、帝國は内外の形勢共に空前の危機に迫つて居る。殆きこと累卵の如しとは眞に今

日の我國情である。而かも上下を通じて尙ほ深き眠に陥り、尼港七百同胞の碧血にもまだ目を覺ましさうでない。或は多少目をさまして居る者があつても、只だ不安を感ずるだけで、更らに奮起するものがない。此のまゝに行けば無論亡國といふ一筋路である。併しながら、吾人は決して失望しない。何となれば、日本を亡ぼすは、天自から其の天職を亡ぼす所にならばである。萬々一にもそんな場合があれば、それは世界を擧げて絶対に白人の靴の下に支配させる時である。不具的文明が永久に人類を支配する時である。不自然が自然を制する時である。吾人は堅き信仰を有す。天は決して如是片手落な捌き方をしない。そんな無法を通さない。窮すれば通するのが自然の法則である。寄せた波は必らず回へす筈である。日本は今方に爾かく窮まれる東洋を復活せしむべく取殘された唯一の反動力である。此の取つて置ききの種子までが潰ぶされてしまふ様では、それこそ宇宙の法則一切の破壊である。夜が極まれば朝が来る。世界は既に久しく暗夜であつた。もうそろ／＼東の齒らむのも程近からう。さうして其の東雲の空に、やがて燦然たる光明を投ずるものは、日出づるの國の旭であらねばならぬ。

とは云へ、いくら運命が来たとして、之を捕へる手がなければ、只の素通りである。凡そ事の成るは、成るの時と爲さんとする力が合致した場合である。旭のさす刻限が来てもやはり高軒で寝て居ては、それは依然たる暗夜の連続に過ぎぬ。棚から牡丹餅主義ではない。近頃流行の熟柿主義とやらでは駄目である。吾人は旦に夕に、念々大御心の上に目覚むべく奮勵せねばならぬ。此の呼吸の通ふ限り、此の血脈の絶えざる限り、我天職遂行の上に二六時中の努力を積み重ねばならぬ。さうすれば必ず時が来る。さつと素通りでない運命が来る。

吾人はもはや目覚むべき時が来た。否な、吾人は既に目覚めた。諸君も起きよ。起きて尙ほ目覚ざる隣の友を呼び起せ。曰く、日本人に還れ、曰く、日本に還らしめよと、次ぎく〜に大聲疾呼せよ。斯くて國民の渾てを覺醒し得たる時、初めて日出づる國の光明は、瞳々として旭日と共に輝き亘る。さうしてあらゆる邪惡と汚毒との雲霧を、此の地上より打ち拂ふと共に、もろくの惡魔外道の輩が、齊しく影を隠くしてしまふ。吾人の所謂大正維新とは、此の意義である。(大正九年八月下旬稿)

再版に臨んで一言

再版に臨んで一言

以上卑見一篇を公にしてより、まだ一月とたぬ内に、西伯利の事情は、着々として吾人の豫告通りに進行しつつある。

第一に列國、殊に米國に對する追從的軟弱外交の色彩は、茲に著しく鮮明となり、早くも尼港並に沿府の撤兵を見るに至つた。元來尼港事件の善後措置として決行した同港の占領である以上、大義名分の上よりするも將た帝國の威信の上よりするも、爾かく輕々しく撤兵などすべき筋合ひのものではない。當局者は之に對して、冬期駐兵の準備成り難きを口實とし、一應亞港に引揚げたる上、更らに明春駐兵の計をなすかの如き口吻を漏らして居るが、果して然るや否や、それが甚だ疑はしい。あれだけの宣言を發してあれだけの行動を起す以上、同時に駐兵計畫を爲すべきは當然のことで、若し初めより此の用意さへあれば、準備が出来ぬなどといふ筈がない。然るを今更駐兵準備の不能を云々するは、恰かも前に尼港救援の不可能を云々せしと同一筆法で、相變らず胡魔化しの逃げ口上と察せら

二
れる。想ふに當局者は、當時國論沸騰の爲め、何よりも先づ之れが緩和策として、不取敢あれだけの行動を起したものの、固とく確乎たる自主的精神もなく、唯だ例により、目前糊塗の一手段として試みただけであるから、やがて米國の一喝に逢着すると、一たまりもなく腰の蝶番ひをはづして、忽ち撤兵々々とばかり、爾かく退却行動に移つたに相違ない。今一層皮肉に事へば、此の行動は寧ろ豫定の行動で、事やかましなければ尼港などは放棄しても、薩哈噠さへ占領して居れば結構位に考へて居たかも知れぬ。頃者傳ふる所によると、我が政府は右撤兵と共に更らに米政府に對して、薩哈噠占領の諒解を求め、やつとこれだけは米國の御目こぼしに預ることゝ成つたとか、イヤまだそれさへも怪しいとか、色々の取沙汰であるが、何といふ情けない我が外交の有様であらう。これではまるで一箇の附屬國の態度で、布哇や比律賓と大した相違もない次第である。近頃日増しに増長しつつある米國から見たら、面白いほど其の威令の行はれるのに満足すると共に、嘸かし日本の屈伏振りの鮮かさに、哄笑を禁じ得ないであらう。さうして加州の排日問題に對し、之が又たどれだけ先方に都合よく利用されて居るか、それも想像に餘りある。

哈府の撤兵に就いても、大井司令官は「今や哈府附近の政情安定の域に向はんとするに依り、本年七月三日の帝國政府の聲明に基き撤兵するものなり」とばかり、哈府附近政情安定を唯一の理由として、撤兵の聲明をなして居るが、いかに胡魔化しが常習的になつたとは云へ、よくも白々しくこんな嘘がつけたものである。現にさういふ口の下から、一方では哈府の我居留民に引揚げを命じて居るではないか。果して政情が安定な位なら、何もさうあわたしく居留民を引揚げるにも及ぶまい。子供だましと云ふが、かう事が露骨では三歳兒と雖ども其の手には乗らぬ。所謂耳を掩うて鈴を偷むとは、全くかう云ふことを指したのである。こんな馬鹿げたことを云ふほどなら、寧ろ明ら様に米國の苦情が恐ろしいから撤兵すると白状した方がましである。それならば責て國民の刺戟劑にはなる。

併しながら原内閣の撤兵方針は、吾人が本論に於て繰返し置けるが如く、敢て今日に始まつたのではない。即ち列國本位の追隨外交を中心とし、右に國內に於ける撤兵の俗論迎合、左に究迫せる財政上の遺繰算段といふ構へて、兎にも角にも撤兵に依り目前の局面を糊塗し、斯くて自己内閣の壽命を一日なりとも延長すると共に、そこに黨利黨福を計らう

と云ふ、これが原君等の滿腹の大經綸なるものである。従つて彼等の念とする所は、初めより撤兵が齎らす國家の利害休戚ではない。唯だ如何にして撤兵の口實を作らんかに在る。所で錯誤に錯誤を重ねて來た西伯利對策既往の行掛りは、容易にオイツレと都合の好い口實を提供してくれない。彼等が最も苦心する所は實に此の一點で、此の煩悶から生ずる様々の小細工が、爾かく後から／＼と尻の割れて行く矛盾の言動となるのである。

昨今政府が全力を傾注しつゝある、彼の緩衝國設置の一件の如きは、全く如上の口實製造を中心を取掛つた仕事である。蓋し彼等の求むる緩衝國なるものは、單に形式上のことである。其の内容實質の如きは、敢て問ふ所でない。唯だ撤兵の口實となる名目さへ備はれば、それで澤山なのである。現に其の緩衝國を支配すべき極東統一政府なる者の實質は結局レニン政府の一支店たること、爾かく甚だ明瞭なるに拘らず、我當局が遮二無二其の成立を急がしつゝあるといふのも、畢竟右の口實速成を希望するが爲めである。爾後例のセミヨーノフが、類りに邪魔者扱ひされて種々の壓迫を蒙るのも、やはり絲はこゝに引かれて居るので、此の唯一の反過激派は、此の羊皮虎質のイカサマ物なる緩衝國に對して、

四

亦た唯一の邪魔者なるが故である。前日浦鹽政府に反抗して起つた哈府の反過激派が、やがて浦潮側の武力に脅迫されて解散したのも其實不干涉の看板の蔭から、間接的に右の口實製造の絲を引かれ、そこに對抗すべき手足を縛られた結果だと云はれて居る。然り更らに露骨に云へば、如今西伯利に於ける反過激派の壓迫は、當面の敵なる過激派側の力よりも、寧ろ局外中立内政不干涉を看板とせる、日本官憲側の間接行動によるものの方が、餘程有力で最も苦痛だと傳へられて居る。近來新聞紙上に現はるゝ、浦潮乃至哈爾濱あたりの電報中、切りに極東統一政府の有望を云々し、動もすれば政情の安定と一般の好感とを吹聴すると共に、一方反過激派を排斥するが如きものを見受けるのも、亦た如上口實製造の爲めにする、御用宣傳に外ならぬので、これは特に眉に唾して讀むの必要がある。

事情は如是にして、吾人の豫告以上に進展し、西伯利は今や日一日と迅速に赤色化しつゝある。早くより我脚下を見透して居たレニンの極東支店長、ウエルフネ政府の中心人物、クラスノシチョコフ事、本名トベリソンなる猶太の一無頼漢の如きは、前の智多撤兵に大抵得意になつて居た所へ、更なら哈府の撤兵、尼港の放棄と、トン／＼拍子に事件が運んで行

五

くので、奴さん愈々以て調子に乗り出し、極東政府は飽迄レニン政府の支店たらざるべからず、日本軍何んぞ恐るゝに足らんなどと、昨今連りに痰阿を切つて居るさうであるが、これは彼れ一個の猶太人のことではない。過激派全體の心事と見るが至當である。我が御用宣傳の通信などは、今度の哈府撤兵により、一般露人より眞實の好感を得たるかの如く吹聴して居るけれども、現に我が官憲の御膝もとなる浦潮の新聞にさへ、撤兵は米人や日本人やが、自分の都合でやるので、何も露西亞の爲めにするのではないと、甚だ皮肉な冷評を公にして居る。況んや過激派を忌憚し恐怖しつゝある多數の良民や、他を祖國の仇として對抗しつゝある反過激派の面々は、好感どころか、どれだけ我が撤兵に對して怨恨と反感とを包藏しつゝあるかわからない。さうして失望の極、不得已自己の安全の爲め、相携へて過激派に走るは必然の勢で、斯くて西伯利の赤化は一層の速力を加重するといふわけである。こんな調子で進んで行けば、假令、我當局者の御希望通り、撤兵口實の唯一材料たる緩衝國が成立するとしても、其の緩衝國なるものは、やがて成立と同時に純然たる赤色國として出現するに違ひない。於是か我當局昨今の努力は、要するに過激派の尻押、レニンの

提灯持といふことに歸着する。いかに撤兵口實の製造に熱心なればとて、これでは餘りに非道すぎる。

吾人が最近に受取つた支那の情報によると、我西伯利撤兵の支那人心に及ぼした影響は多大なもので、今や支那政客の殆んど渾ては、米國依るべし、日本頼むに足らずてふ觀念を持つに至つたとのである。これも吾人の豫想通りで、當然必至の成行きであるが、これが今後の我對支關係に向つて、どれだけ障害を醸すかと思ふと、フンさうかでは濟まされぬ。且つ此の支那人心の影響は、即ち朝鮮人心の影響である以上、事は益々容易でない。想ふに目下の對米問題で、やがて加州の痛棒を喰はされた結果が、重ねて東洋に反射し來るの時、彼れ西伯利の過激派を初め、此の支那人心、此の朝鮮人心に及ぼす影響は、更らに一層の痛烈を加へるであらう。火事は段々近づいて來た。火の手はいよいよ熾んになつて來た。否らず、火の子は既に吾人の頭上に降りかゝつて來た。豚と雖ども身體に火が付いては、ヂツとして居らぬ。如何に昏睡状態に在る我國民でも、かうなつてはモハヤ寝ぼけて居るわけにはいくまい。(九月廿四日追記)

此の卑見一篇は、曩きに四千部を印刷して天下の士に配布したのであるが、其の後各方面より續々要求があるので、今回更に五千部を増刷することにした。末段『再版に臨んで一言』の一章は、其の際追加したものである。

尼港問題を通して終

大正九年十月十五日印刷
大正九年十月十八日發行

【定價金參拾錢】

著者 五百木良三

發行者 東京市京橋區松屋町三丁目二番地 岩谷新三郎

印刷者 東京市京橋區本八丁堀二丁目二番地 大西熊夫

印刷所 東京市京橋區本八丁堀二丁目二番地 大西印刷所

發行所

東京市京橋區松屋町三丁目二番地

純勞俱樂部

151
270

中外新論

三週年紀念義人號 五百餘頁 特壹圓 拾錢 送錢 四錢

對米國論

子爵加藤高明

米國の反省を促す 栗原彦三郎

對米所感

頭山 滿

日米の國交 侯爵大隈重信

正々堂々

末永一三

帝國の一大失態 箕浦勝人

米國自ら手を焼かむ

小松 綠

法の前人種平等たれ 寺尾博士

故田中正造翁遺稿自叙傳・演說集

追懷詩歌、故翁に關す

詩歌集・書信集

追懷詩歌、故翁に關す

日本は滅びず」と「英國はたじろかず」と

三井甲之

濱の家時代の回顧

頭山 滿

感泣錄

栗原彦三郎

十月一日發行

東京赤坂區氷川町二八番 中外新論社

本誌普通號定價五拾錢半年分參圓一年分六圓送料共

終

